

7807

222  
119

松林伯知講演

吉田欽一連記

實説  
御座屋騒動



和裝全二冊正價十五錢

本書ハ著者多年研究ノ功ヲ積茲最モ敏捷輕便ノ新法ヲ發  
明セリ此法ハ普通算ノ如ク九九ト割算ヲ用ヒズ歸一法ニ

理學士宮本久太郎君序

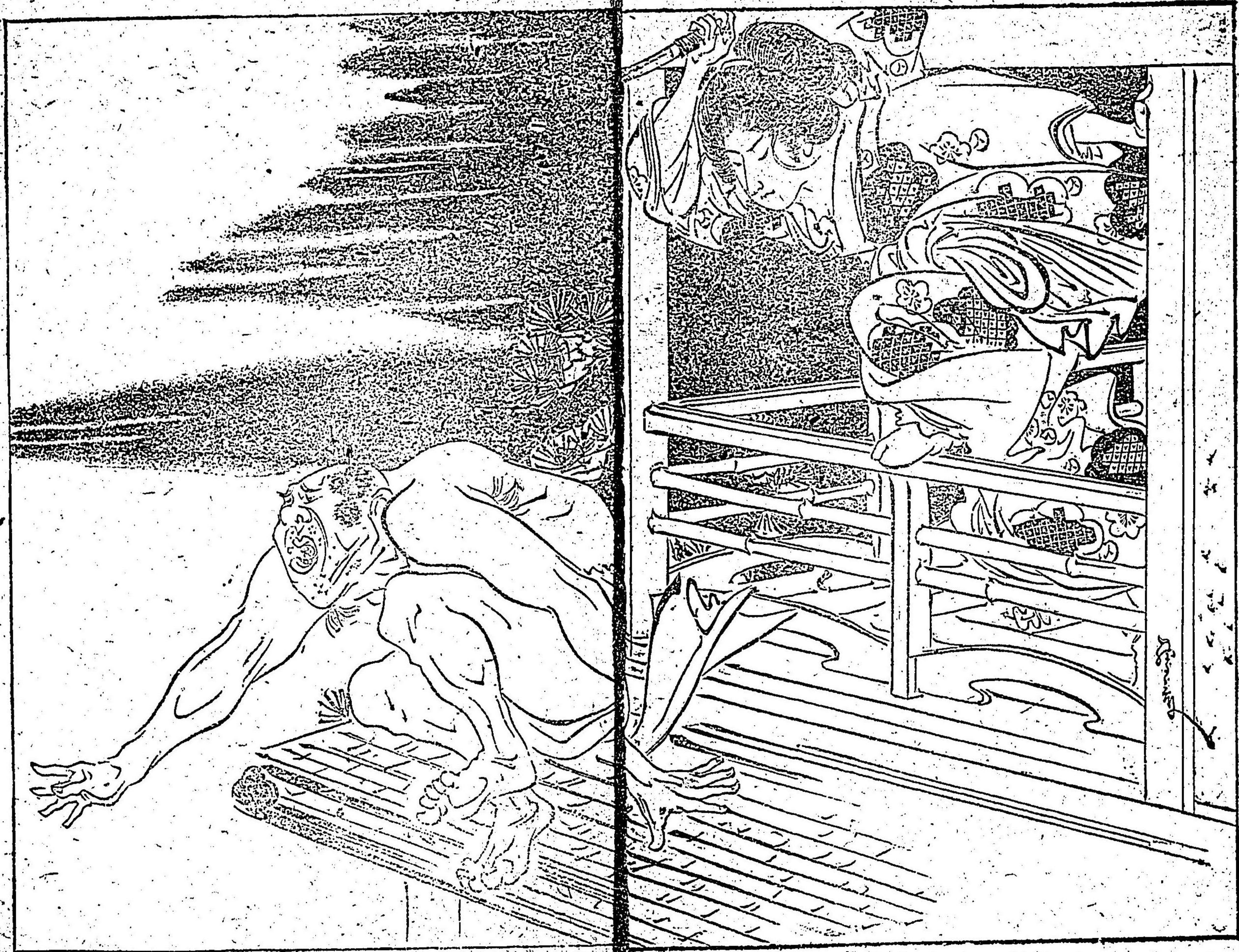
速習算法

隨天堂秦榮九郎君著

依ラズ故ニ如何ナル幼童モ三日ヲ出ズ習得シ尙一週間熟  
練セバ從爾タル手數ヲ省キ神速運用ノ妙術ヲ得ヘシ

郵稅金八錢

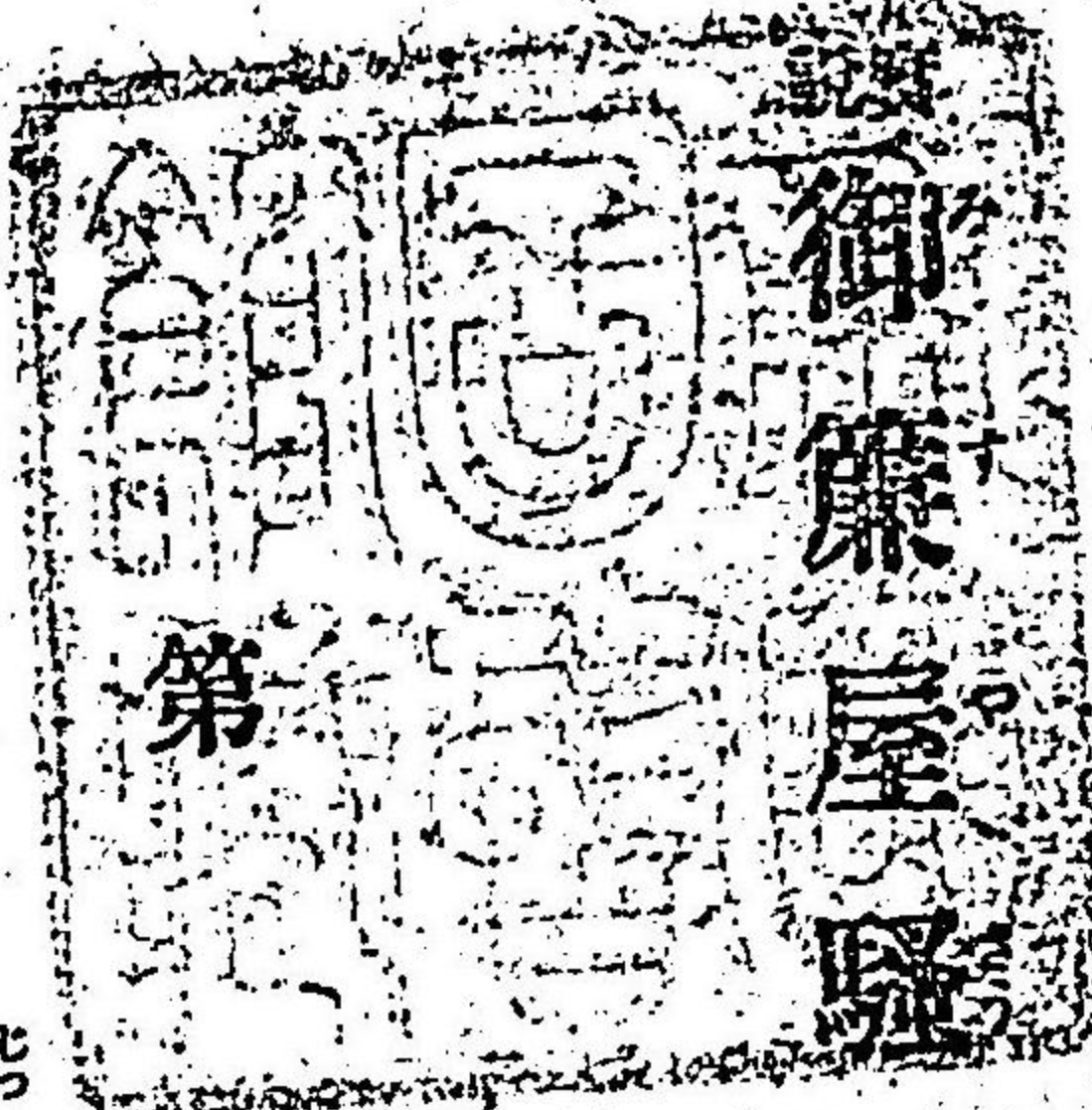






特  
182

御簾屋騷動



騷動

席

松林伯知講演  
吉田欽一速記

エー……本日より實説御簾屋騷動と名附けまして伺ひますお物  
語りの寛政に起りましたして天保の始めは其局を結びますお物語り  
で御座いますすが只今の淺草花川戸は御簾御用を致しまする淺岡  
市右衛門と云ふ人物が御座います此家の騷動から致しまして大  
不和を諮方及びしまするが此淺岡と云ふ人の先祖を尋ねて  
見ますと云ふと駿州駿東郡の者で御座いますすが今川義元の財政  
を主として居りました淺岡頼母と云ふ者の系統で御座います今

正價金十四錢

<p>本書ハ故眞勢中州先生ノ易傳ヲ主トシ 其他諸大家ノ說ヲ折衷シ易學ノ秘蘊ヲ 網羅シ平易簡明ニ説述シ應用上復遺憾</p>	<p>香象 高嶋嘉右衛門君題字 <b>易學秘傳</b> 和二三裝 續可 柳田幾作先生著</p>	<p>ナカラシム夫ノ從來卦爻ノ辭ヲ舉ケテ 單ニ之ガ解釋ヲ下ス者ノ比ニ非ズ請フ 此ノ種ノ著述ト同一視セザランコトヲ</p>
--	---	--

郵稅金八錢

御簾屋騒動

川義元の遂ひも桶狭間も倒れて氏真の世とありませう間もなく致  
しまして氏真が遂ひも古主の爲めに滅却致して仕舞ひました遂  
ひも此駿河も徳川公の物と相成り家康公の永く御居城遊ばす事  
もありました此時淺岡頼母の留守居致しまするが仲淺岡右近と  
云者が留守居を止めて土着致し今の千軒下當りも小鼓を打つて  
諸を編つて世を送つて居りましたのを主君が不憫と思召され遂  
ひも是れを折りくお招き遊ばして今川家盛の自分のお話も  
をお聞き遊ばして又其頃の財政の話などを致しますで御座いま  
すけれども別よ此淺岡を重く持上げた譯で御座いません依つ  
て淺岡の是れから主君のお話等を伺ひ一層江戸も出た方が宜か  
らうと云ふので遂も二代將軍の御世を去るしめした頃も江戸表  
へ出三代將軍家光公が御威勢赫々たるの時遂ひもお御簾御用を  
願つて漸々小石川水道町も居られました御座いませうが新地替と

御簾屋騒動

相成りました八代將軍の時も淺草花川戸へ家に移しまして御座  
いますが是れが淺岡市右衛門と名附けまして斯所も住で居りま  
す何御用くとも云ふて居ります内も御簾御用の將軍様のお御簾  
屏風で有るとか御簾様のお御簾屏風で有るとか二百六十四大名  
の中で大跡の出入りを致す島津侯も毛利侯も又筑前鍋島何れ  
の大名でも出入らざる所も御座いません東北も當ての仙台の伊  
達侯米澤侯佐竹津輕侯とお出入りを致しました然るも此市右衛  
門の代もありませんして妻が早く相果して仕舞ひました残れる一人  
の娘で御座います大家で以て金に困らず又何事を致しますよ  
附きましても不自由の無い己の身体で居乍ら妻が無いと云ふの  
に至って不可者で居座います娘の静も今年九つに相成ります是れ  
も乳母のお宮と云ふのを附けて然う致しまして今から學校へ通  
はせると云ふので居座います其頃も學校など云ふ今日の如

御簾屋騒動

き物がございませんから手習師匠へ通ひせる晝過ぎよなれば琴  
の師匠又の狩野派の繪を少し學ばせる其外三味線笛大鼓踊で有  
るとか又の碁將棋とうまでも學ばせて居ります所が此靜の幼な  
い時よりままして天然痘に一寸保りまして是れも悉皆り癒せて  
顔の腫しう御坐いますが目少し悪う御坐いますと云ふので  
の御座いませんが紙いのです容貌の衆に勝れて居りますし形容  
致しましたなれば何んな美しき事を申しませう器量の江戸廣し  
と雖も斷じて百人千人の中へ入れても下らんと云ふ位です只目  
が少し悪いのが創です能く人が申しますすが女の目に鈴を張ど  
云ふ位で御坐います鈴を張れと云ふ様な者で御座いません少  
し細い様で御坐います二六時中眼病で痛で居ります親父も是れ  
を心配して居りますのたつた一粒種のお静の事故色々手を  
盡しますすが其時分の未和園陀醫も無い時分で御座いますから善

御簾屋騒動

い醫者と云へば招きて藥を貰ひますけれど中々全快と云様な  
事に至りません乳母のお宮も夫れ斗りを心配して居りました  
けれど身軀に別に異條の無い事で御座いますから折節の手習  
師匠を休む事も御座いますが大抵の雨の降る日も風の吹く  
日も厭ひなく参ります市右衛門の只此お静のみを樂しみにして  
居ります外に已に樂しみの御座いません自分の一寸風雅な真似  
をして發句で有るとか天狗俳諧とか何とかいふて遊んで居りま  
すが折に觸れて此人道樂といふの何かといへば餘り立派な人  
の仕無の博奕で御座います金銀を懸て安座を擡いてボカリ  
……と遊るので御座いますが一ツ天地六南三北四とかいふて理  
屈を付けますけれど彼で取られるといふの實に口惜くつて  
堪らんといふので人に千兩ぢやあ千五百兩ぢやあと負けるので  
すが何でも紳士の方々の此んな品行の悪い博奕ををする様さ

御 簾 屋 騷 動

御方の日本全国も中以下の者は存じません中以上の御方決して  
有る譯でなく官員方が申し彼様な事を仕ますと官紀振肅なん  
て云ふ事が有ります攻撃を蒙りますや新聞紙等も不徳とか不  
道徳とか言はれますから左様な事更に無い様に斯う思われま  
すけれども西洋から渡來したトランプとかお花などは是れの特  
別に見えて紳士社會も流行仕ます然うで有ります此淺岡市右衛  
門博奕が好んで四五一とか三二六とか恐ろしい事を遊りますから  
夫れを娘のお静が聞いて 静「乳母やあ……」 宮「何んで御座いま  
す……」 静「困つたね何んだか父つさんが此頃の博奕をばあさる  
然うだ 宮「本當に然うで御座いますよ娘さま是れと云ふのも阿  
母さんが無いからで御座いますか困りますね……」 静「阿母さ  
んが居らしたらば斯んな事有るまいね……」 宮「然うで御座  
いますよ 静「阿母さんが何うかね……」 宮「一人御探みなさる

御 簾 屋 騷 動

様事またたい者で有りますね…… 静「然うね……」 夫れで  
乳母や後生だから彼の明神下の伯父さん話してお呉れでい  
か 宮「夫れぢやあ明神下の辰巳やさんへでもお願い申しやう  
と神田盛所町の辰巳屋嘉平と云ふ羽織の紐其他絹真田を表へ並  
べて商なつて居りますか質兩換もして居りますか随分財産家で有  
ります此辰巳屋嘉平が死なました母の里方で御座います夫れへ  
参つてお宮が話を致します嘉平も 嘉「善い女房が有つたら……」  
……と思つて居ると斯所又一つ淺岡の家も起る御簾やの騷動の來  
りますると云ふのは是れ何日でも何うも死なせんのか女で御  
座います故に犯罪の庭に女有り云ふ壁ひも漏ぬ者で御座い  
ます佐竹右京の大夫の御家來で三百石斗りお取遊ばします大宮  
權之丞と云ふ男の美しい事其頃の俳優で申しましたあれば先づ  
尾上菊五郎彼言つた様な善い男で御座います何日でも羽手やか



御簾屋騒動

赤服装をして居りますが此淺岡の家よの時々参りまして二きき  
朋友で御座いますか恭の相手将棋の相手又時に寄ると同士の内  
へ這入つて博奕の相手よもなると云ふ此大宮権之丞寛政の二年  
四月で御座いますか恐ろしきボカ〜熱い日で御座いましたか  
大宮の淺岡の家へ参りましたか……権淺岡家かへ……市居  
りませうか何誰……権私だよ……と権之丞の奥へ通る 權時よ  
御主人も……オィ〜花も散て仕舞つて世の中何となく嫌  
な心持にあつて來たが牡丹でも見るより仕方がさいが夫れより  
今日の龜井戸の藤を一つ見ようと思ふのだが……然うして藤  
を見て柳橋の馴染の茶屋が有るから柳橋の馴染の茶屋へ行つて  
一杯飲んでお前よ見せる者があるのだよ……何うだ一つ行つて  
呉れ無いか……と云ふから淺岡の市龜井戸の藤位見るの宜  
う御座いますか……酒の御交際御免で……又酒も宜う御座い

御簾屋騒動

ますが貴方乃女の方でせう踊の師匠か藝子の弾く三味線を弾せ  
るなんて……夫れも宜う御座いますけれど吉原藝者と云ふ者  
が有りまして誠又大べらで遣りますけれど何うも外ぢやと思  
ふ様な藝者と云ふ有りませぬからね……權夫れ淺岡不  
可あひ吉原の藝者といふ者の彼に賣物買物根が女郎から變化し  
た者だ所が町よ居る所の踊の師匠とか三味線の師匠とか云ふ者  
の中々堅いのだよ然うして踊の師匠など時よれば將軍の御  
前へも出る二代様の年中お伽をする斯う云ふ格式有る者だよ  
市へエー……權中々吉原の藝者なんぞ言ふのどい雲泥の差  
違なのだよ……マア……彼んな藝者なと云ふ者の少しく祝儀  
でも遣れば判然客よ従ふと云ふのだが片々の遊びの然う不可無  
いのだ假ひ百萬兩の金を積んだ所が言葉よ従ふんと云ふのが素  
人だ商賈人との違ふよ……市然うさね……權何の共あれお

御簾屋騒動

前に見せる者が有るのだよ……静坊も阿母が無ければ困らぬな  
……六ヶ敷者を置くよと云ふと静坊も氣兼ねるから妾を置くしや  
い……市私が持つのかい……權女房が居た所が妾手かけの  
自分の働きた何うでもあるから宜からう市元談を言ひ入れて  
困るよ……權己れが一番餘計な事を言ふ様だけれども一寸お  
前も氣に入つた者が有るのだ……市先れの御免を蒙るよ年に  
も耻す妾手かけ……夫れよりの矢張天狗俳諧とか博奕の方が宜  
いな……權お前直……足の上げ下しにも博奕……と云ふが  
盆莖の向かふに四割と云ふのが有るが無職渡世のする者だよお  
は簾屋用の主人が然んな事をするの悪いから以來の博奕と云  
ふ事金刀比羅へでも立つて盃皿へでも錠を降して然んな事を  
仕無い様よ妾でも置いて其妾と遊んで居たら何んな者だよ……  
格別だから兎も角悪い事言ひんから一緒に來るが宜よ……と

御簾屋騒動

仲の宜い大宮が勤めますから市然んから行方……と淺岡市右  
衛門の出掛ける積りにまました此淺岡の未だ年五十の漸くな  
つたと云ふが幾らか色氣も座います此大宮が美麗として居  
りますから餘り穢い服装でも参られませんかから拾小袖も博多帯  
よ一寸した羽織を着て市行つて來るよ……權左様から……  
と淺岡の乳母と手代も委せまして大宮權之丞と其時分の車有  
りませんか御籠も乗つて行く程でも有りませんから運動がてら  
よ總井戸天満宮へ参詣よ及んで藤の花を見たが別よ面白も何  
よも座いません故彼から下りまして取つて返して法恩寺橋か  
ら吉田町の近邊を彼方へ歩き此方へ歩き其日の暮合ひ自分も柳  
橋へ参りました其頃から柳橋よ座いました料理屋の梅川樓に  
龜清で座います何うか……萬八どか云ふの其後出來た者で  
座います此梅川の中々其料理も旨くして出す家で座います

御簾屋騒動

が此家へ這入つて川風も吹かれるの夏初めですが又格別で  
私に何處でも宜しい…… 權「夫れぢやあお出ささい……」と梅川  
へ參つて大宮の淺岡を二階へ逆て行つて又降りて来て何か下で  
マゴくして居ります暫くして來ましたするど料理を持つて  
來る大桶は焼き物の定つて居ります其内お銚子を持つて來る女  
がッペコベ言つて居ります 權「時よ淺岡……」 市「何んだ……」  
權「お前も見える女が一人有るが其女の氣も入つたれば乃公よ  
話しをして呉れ……」氣も入ら無ければ仕方無いが三味線を引  
かして…… 市「夫りやは免だよ 權「まわく……」 宜いよ氣も  
入ら無ければ祝儀でも遣つて追ひ歸すから……」 市「夫りやは何  
だい……」 權「夫りやは此直橋町も居る西川小留と云ふ三味線の  
師匠兼師の師匠なのだよ今年確廿六位よなるのだよ……」何うも

御簾屋騒動

美しい女だよたつた十七八よしか見ぬないよ…… 市「へエー……」  
權「随分男を泣かした事も澤山有るので薩摩の侍士も腹を切ら  
した位なのだよ……」 市「夫りや驚いたね……」美しい女でも腹を切  
らせるなんぞと云ふの嫌ひだよ此年よなつても生命の欲いも  
の…… 權「馬鹿な事を云へ侍士の向ふが勝手よ腹を切つたのだ  
よ……」 市「夫りや何う云ふ譯さのだよ……」 權「其女も惚込んで  
二人が切合を初めたのだよ……」 市「馬鹿な奴だね 權「夫れが上  
役へ段々知れたものだから切腹して申譯を立てたのだよ……」其  
位の女だお前も見えるの…… 市「へエー……」 權「男の其女の  
爲めに生命も入らんと云ふ實も美人といふのを見せて遣らう  
……」お手前の氣に入ら無い事の有るまいお手前の五十だらう廿  
六の女の萬更悪い事ないだらう…… 市「何うだか知りませんよ  
……」 權「知らん事が有る者か……」又其愛嬌滴る斗りで市右衛門

お手前纏られての不可無いせ 市私しの人々が善つて纏られます  
女で無くとも……貴身も纏られます…… 權然う始めから往  
生しては困るよ…… 市夫れでも女よの向を纏られます一逼私  
が女房が死なましてから途ひ遊び又往きまして一年斗り通ひま  
したねー……すると其女が私しと惚れました…… 權のろけを  
言つちや困るせ……

第 二 席

市夫れから其女が指なぞ切つて呉れました……其時の本當に  
呉れたと思つて居りました……其時本當と思つて金を出して遣  
りました……親元へ百兩送くつて遣りましたすると色男と逃げ  
て仕舞ひまして今聞いて見ますと芝の露月町へ店を出しました  
そうです 權夫りやつたら無いさ…… 市此間觀音の境内で會

ひましたら……何日もは機嫌宜しう座いますといひましては  
蔭様で夫婦なつて居られますといひましたから身分が無けれ  
ば尋ねるのですが殊に娘の手前も有りませうから黙つて居まし  
たが女又掛けると痴呆て不可ません…… 權マア夫りや馬鹿に  
され過ぎたね…… 市大宮さん其んな女を持つと娘のお静又難  
儀を掛ける様おタカくか有ると困りますからマア……是れは  
止した方が宜う座います 權然うお手前の様又先の先まで心  
配したつて何うなる者か娘が病身ぢやア無いか殊又目が悪いの  
だ……此間も勝良川又聞たらお前の所のお静さんの生涯目が癒  
らないが殊に寄つたら盲目なら無ければ宜いと言つたせ  
市ヘエ…… 權盲目になつたら何うするへ相續悻も無いから  
養子でもするのだらうが盲目になつて来無いがお前未だ五  
十だから是れから六十四五七十四五まで生る量見では覺なもー

御簾屋騒動

……廿四五年生さるのだから妾でも貰つて子が出来て見れば男  
で有つたら是れが廿四五歳なるだらうが雁屋の家立派な  
繼げる様な者よ六十になつてたつて子供の三人や四人拵へる物  
が有るが金も困る事無いのだから宜いのだよ大宮が親切を思  
つてするだから……オイ……と呼びますと女中が女何か  
は用で座いますか…… 權下も待して置いた西川の師匠に此  
座敷へ……とゆふのを淺岡是れを聞いて 市大宮さん其西川の  
師匠を此所へ入れ無い様に願ひます 權何故だい…… 市私に  
女が好きで座いますから惚れると不可せんから 權馬鹿な  
事を……師匠も来て貰つて……といふ内に小留の…… 留は死  
なさいまし……と仇ばき姿で這入つて來ました服装を見ますと  
薄色の何やら知りませんが紋付是れの諸方の段へ上りますせ  
いで座います帯も至つて美麗で座います普通の婦人がお

御簾屋騒動

締めになるのどの違ひます頭髮の櫛下何れへか今日の浚ひの在  
た戻りかと思われ申す這入つて來たの廿六七日の廿才を何ん  
ぞ越した様も見なせん白粉を薄う粧りまして餘り附けて居り  
させんけれども天然の美を粧ひ旨くして居ります丈其艶も亦一  
段で御座います西川の小留の大宮も會釋をして淺岡市右衛門方  
へ向かひまして 留お初め御目も係ります…… 西川の小留で座  
います何うぞ又最負を……大宮さん何うぞ口を添へて被下  
いな困りますから……何んだか這入つて來た斗りで氣まりが悪  
くつて何んと言つて宜いか分りませんから 權餘り然うでも無  
からうせ薩摩人の二人も殺した女が…… 留又然んな素破袂さ  
して初めて然ん事事を聞くと何んな悪氣かと思ひますよ……  
權然うですかね…… 留然うですかちやお有りませんよ私し  
の蚤も殺すの嫌位ですよ…… 權男を殺すのが上手で……

留「イヤですよ元談斗り言つて……」 權「淺岡顔を上げて見たまへ男も迷ふと……」 留「お冷かしなさんなよ……」 權「本當だよ淺岡一寸顔を上げて……」と云ひれて市右衛門何となく顔を見たくなつたと見えて市「ハハ……」私「花川戸の簾屋で淺岡市右衛門と云ふのですが始めては目も係ります貴方の踊のお師匠さんで入らつしやいますか、留「然うでは座います、市「ハハ……」お美しくしい事で、留「然んなは挨拶をされては此お席に入られませんですよ……」は免を蒙ります……」と猪口を杯洗の中で洗つて淺岡市右衛門又出しましたから市右衛門の猪口を、市「大宮さん御免……」と指すから小留の徳利を持つて秋波に大宮を見て淺岡へ會釋する其容貌を市右衛門が見て、市「是りや宜い女だ此様な様子の宜いの無いかと思ひましたのが爲りよ、市「ウーン……」と思はず呼鳴を發した……」ウ「見た様か男です是れを見て居た大宮權

之丞 權「締たあ……」と思つて、權「淺岡さん小留さんが思ひさしといふのの嬉しからう……」 淺「元談言つちやあ不可無……」 權「小留さん淺岡さんの奥さんが無いのだよ……」 御新造「なしなのだよ又孤獨男ですから……」 留「アア……」 嫌な事を仰しやつて奥さんが無くつて入らしても外にお馴染が有りますのでせうから……」 權「女あんど出来る様かんなやあ無いよ今も話をしたか吉原の玉屋の女郎に百兩取られて色男も奪らはれた位だ者人間に極宜いのだよ懇張て居るけれど坊さん育ちで丸切り犬である……」 市「然んか馬鹿な事を言つちやあ困るよ犬ころ……」何て小留さん大宮さんの言ふ事を當にしては不可ませんよ此人の佐竹の屋敷で以つて随分御術や何かお使ひなさつて本を見たり物を齎くのにお上手で有りますければ人も悪い事夥多しいので有りますよ町人をいぢめて私の家へ來ては年中……」 權「オィ

く……と大宮の注意を受けて 市ア……驚いたも……少  
しでいふ所だつた 權人が聞くと思ひから…… 市誠又相濟な  
かつた…… 權小留……一寸顔を……と大宮の其儘は此席を  
一ツト出ると跡から小留が二三杯呑たので顔をほんのり赤らめ  
て 留大宮さん何んです…… 權貴様の事を随分叩いて遣つた  
けれども彼奴がお前に大變な惚れて居るが此上も無い事だから  
彼奴の機嫌氣襪を取る氣の有るかい 留大宮さん取り込むも取  
り込ま無いもまいじや有りませんか 權夫れいとうだがはん  
どうに行く氣が有るかい 留其替り淺岡さんの所へ行ば貴方の  
縁を切らなければなりません…… 全体出来るか出来無いか此  
方斗り定めたつて向ふの盃見が……淺岡なんて言ふの止して  
お呉んさい 權乃公の縁を切つて遣らうじや無いとお前の  
身の出世なるのだから……淺岡と乃公の友達だが乃公の佐竹

で三百石頂戴して居たが乃公が亂暴な事をするので廢嫡された  
が仲人になつて遣るから先方よの金も有るのだから行くが宜い  
……然し踊の師匠が簾屋へ飛び込む事の出來ないから乃公の  
考へで此梅川の娘にしてお前を向ふへ遣る様な事にすれば宜  
いだらう向ふに九ツよなる娘が有る丈けだから……ま……  
何しろ乃公の手を切つて仕舞ふから…… 留夫れじやあ四年此  
方斯うなつて居ますか逃げて仕舞つた積りと思つて頂けば宜う  
は座いますか……夫れ斗りぢや無い……耳を貸してお呉ん  
さい……と何やら大宮へ密語しましたから顔色を變へまして 權  
ウーン……然うか夫りやあ知らあかつた夫れじやあ貴様の子持  
よなつたかの止荷の事だお前夫れで行け權之丞然うなれば其時  
の盃見だ……と流石な權之丞も是れに少しく避易しましたが  
再び元の席へ歸つて市右衛門又向つて 權淺岡何うも小留が今

御 簾 屋 騒 動

乃公の膝も枕れて淺岡さんと云ふお年を老た方の奥さん何うぞと云ふのだが……何うかお前さんお取持をど泣かれたよ、つた顔の何うも締りの無い様だけれども鼻が大きいからつて……市「オイ……人を嘲弄しちや困るせ……」  
又格別だお前も限るといふのだよ……嫌でも是非承知して貰ひ無ければならぬのだから我慢して承知して呉れ……市「貰ひ無いと云ふ事無いが踊の師匠を女房よすると云の可笑き……困るのだが……」  
權「お前さへ量見が定れば私が何うでも取持つて上げるが……私に是非共願ひたいと思ふのだよ彼の女の此梅川の娘よするから辰巳屋を仲人よお頼みな夫れとも立つてと云ふおれば大宮様之丞中よ遣入つても宜いが……」  
市「辰巳屋への壁ひ梅川様の娘と云ふても彼方の方での屹度種々探りませうから……」  
權「夫れぢやお妾にするが宜いや……然して氣も入つたら女房も貰

御 簾 屋 騒 動

つても宜いが市「貴殿が仰つた通り娘が旨目もあると困りますから男の子が欲しう御座いますから貴殿が仰被下のですから女房も貰ひませうが仕事や何か出来ますか」  
權「仕事に充分に出来るけれど又夫りや何うでもするがま……遊藝の何んでも出来るからお静よでも致へて市「夫れぢやお然うしましやう」  
權「小留此方へお這入り留私しが行き届きませんで済みませんじやお御坐いませんか大宮さん……」  
淺岡の旦那様此後お目掛けてとでれた様にして淺岡の側へ寄りましたか戀風の身も染みたりと思ふや權之丞此坐敷をば立ち出ましたか二人の此所にしつぱりど仇な夢を結びました是れから始めて梅川樓の主人を談判致して親元も致す事よなりやしたが自分仲人よありまして何うやら斯うやら寛政の二年六月の廿五日全く式を上げて大宮權之丞が仲人で御座いますか七八九と三月たつてヲギヤア……と男



御簾屋騒動

の子を生みました其男の子を生んで間もなく婚禮をいたしましたの  
大膽な者です 留貴方の子を宿しましたと……詐つて懐中へ  
イナ……物をに入れて全く淺岡市右衛門の種を宿したと言ふ様  
に言ひふらししました淺岡の夫れ迄の随分大きな腹をして居たが  
餘り小さくなる筈で有りますが夫れを分ら無いと云ふのも妙な  
男で翌年より安々と子を産だすと云ふて詐つたるのの大  
膽不敵で御座います尤も淺岡の家で大きな工合が悪いから梅  
川樓へ遣つて生して呉れと斯う云ひまして梅川樓で子供を生み  
ました四月から有りますと丁度翌年の二月に生れるのですが  
九月だ二月と子供の大ささか余程違ひますか只大きい子供を  
生んだと不思議と思つて居た位で御座います此市右衛門の元  
來善人と川ふ丈けですから何とも言ひませぬ寛政三年正月此  
子を連れて來ましたので娘のお静が 静扱つて父さんが全く阿

御簾屋騒動

母さんが他から子を持つて來たのをおつ附けられた……と思ひ  
ましたから是れを母の里辰見屋へ話しまして父も向つて彼の小  
留の初め終り種々説き聞かせました時 市成程然うして見れ  
ば乃公が騙されたかど女房のお留も向つてお静の言つた事辰見  
屋の言つた事を残らず打ち明けて離縁を仕様と大宮權之丞も話  
すと大宮が 權乃公が世話をしたのよ其んな不都合が有と言ひ  
れての斯く云ふ大宮權之丞の顔が立たんが小留も對して三千兩  
の金を遣るなら切つて遣るから……と云ふ此咄し市右衛門の  
泣き寝入り小留の市右衛門を旨く誤魔化して仕舞つたので 市  
人の種で有らうと何で有らうと乃公の子と思へん何んでも無い  
……と市右衛門の嬉しがつて居ります小留のお留のお静が何か  
に付けて邪魔で御座いますから大宮權之丞も話し毒を取つてお  
静を殺さうとした此時却つてお静を殺さずして小僧の庄吉と云

ふ者を毒殺し及びましたが下女のお玉と云ふに此毒を嗅しむる  
大事に至る……危き生命を全たうなすより斯所は  
大宮權之丞白乃を振つて再び淺岡家へ繰り込むと云ふ大珍事  
の引き起りますお物語りと娘のお静が化け物なるお話の  
次席より申し上げます

第三席

扱て小留といふ婦人を己が五十以上となつて半分から若い女房  
を貰ひました故何うも事が治らん様な譯で事の大宮權之丞の種  
を悉皆引受けたので能くも權之丞も似た市太郎市善い子が生  
れた……市右衛門の夫れどの氣が付かず居りましたけれど  
もお静が静お父さん何うも市坊の大宮さんへ似て居る様です  
ね……と云ふ是れを聞いてから市右衛門も少し市ハテナ……と自分  
親切にして呉れる様だけれども事は依つたら怪しい……と自分

も少々氣取りました……夏の事で御座いましたか庭は益提灯を  
點て蚊帳を吊して一寸麗しの花御座を敷いて未だ寐るにも一寸  
早いし蒸熱いと云ふので浴衣を着て三尺を締めて居るの主人  
の市右衛門美麗な人で御座います小留に於きまして一寸奇麗  
な浴衣を着て八反と縹子の鯨帯をびて居りますすが頗りに蚊  
遣火を焚きながら市太郎と云ふ子供を眠りも附けて居りました  
留一寸と貴方能く市坊の寝て居りますわ市然うよ能く寐て  
居るな……留本當に能く寐て居りますか……宜い心持ち然う  
だ……何うも滅法能く寐て居りますすが市坊の顔の役者も似て居  
ると言ひますよ……市然うさ役者にも似て居るかも知れ無い  
が大宮權之丞さんも大分能く似て居ると云ふ話だよ……と云  
ふ此一言もギョッ……として留貴方を言ふのですね誰か又  
しやくられたのですね……大宮さんが家へ來る者ですから然ん

御簾屋騒動

な事を言つたのでせうが何で此子が大宮さんに似て居るのです  
貴方も似て居ると云ふ事有りませうが大宮さんに似て居ると  
云ふ譯に無いじやありませんか……市夫れり大宮と始めて  
梅川の二階で會つたが乃公……と逆上して仕舞つたが前  
の様な女が乃公の所へ来て呉れたのだから夫りやあも……何  
と言つて宜いか譯が分らないが……けれども私の考へでん新  
な美の子を生うとの思ひ無かつたよ矢張り私見たいな懺子  
出来れば宜かつたが大宮さんに似て居るし夫れは月も奇怪から  
……留夫りやあア……誰が言たか知れませんが八月で生  
者も有りますし九月で生じと云ふのも有ります月足らずの子  
の何うしても肥立ちが悪いとか何とかが言ひますが貴方然んな事  
仰しやつちやあ困りますので有りませんか……然んなに嫌な事  
う仰しやられますと私の何うして宜いか分らなくなつて仕舞ひ

御簾屋騒動

ます……然んな事仰しやれば私のお暇を頂くより仕様が御座い  
ませんよ……市何も暇を貰はなからやあ成ら無いと云ふにも  
及ばないやね……留でも……誰か言ふたのでせね市誰も言  
や仕せせんよ留イ……誰か言ふたよ違ひ有りません市  
夫りやあね……誰も言ひないけれども世間の人が種々言ひます  
よ……留世間の人が種々……餘り彼お静坊が何か饒舌だから  
ですよ……市お静が何饒舌者かな大丈夫だよ……留然うで  
すか……夫れあれば何とでも世間の人が言つても私の貴方より  
外に廣い世界に男の無いと思つて居りますか疑られる者の仕方  
が有りません……と其儘喧嘩をして居りましたが追附か無いか  
ら蚊帳へ這入つて自分の胸を問ふて留ア……悪い事出来  
無い大宮さんと彼云ふ事をした事ゆゑ夫れが爲め此様な事に  
なつたのだが酷いのに大宮さんだ此所へ私を篋めて呉れたの

御簾屋騒動

宜いければも自分斗り善い顔をしてア……困つた者だ何うし  
たら宜からう……と思案も呉れて居りましたので座います  
て其内にお静がツベコベ儂舌るのを知つて留一躰彼の女の子  
が能くおいのだ……ど是れから糞子酷めをして箸の上げ下しに  
も捻つて見たり打つたり叩いたり自分が三味線が出来ると云ふ  
ので三味線を教へ踊りが出来るよ云ふので踊を教へる其教へる  
度に打ち叩きました夫れを誰れも知ら無いで居りましたのを  
斗らずも神田の辰巳屋と夫れから下谷の仙臺屋善八といふ人が  
餘りよ見兼ねました故善當分お静の私が預る……といふてお  
静を自分の所へ預る様な事になりました然う致しまするとモ一  
……家に邪魔者の無くなつて仕舞いました夫れ故留斯う邪魔  
が無くなれば大宮権之丞さんと何日か會へる事も有らうと思つ  
て居りますと恰度其翌日の事で御座いました太宮権之丞から手

御簾屋騒動

紙が御座いました其文句の……山谷の八百善も待つて居るか  
ら一寸今日お前暇を見て来て呉れといふのですから何んな事か  
と思ひましたから留一寸観音様へ行つて参ります……とお花  
といふ女中を連れて出て途中でお花と云ふ女中を観音様へ遣つて  
留先へ歸つてお呉れ道で放れたといふて私が小言をいふが是  
れを上げるから……と金子一兩呉れました故お花の大欣びで觀  
音様へ出掛けて行きます此方山谷の八百膳も戀人が待つて居  
る故皆悉作り飾つて参つたのです女中の案内で頓て八百膳の二  
階の廣間へ通ります方々入り八百膳の事で座いますから軸  
が掛つて居ります此軸も狩野家の何某が筆を振つたといふの  
で襖屏風といふのの寶又美術家が丹精を込めたのです絹らかき  
布團を出す女の残らず木綿の服です待ち受けて居た大宮権之丞  
麗しき所の糸織の衣類仙臺平の袴を着つ白い扇面を膝に突いて

御簾屋騒動

居りますが小留の来ましたのを見て 權此方へ…… 留まあ……  
……貴方は機嫌宜しう御座います 權ウーソ…… 此間手紙を遺  
して呉れたから是非行うと思つたが何だか体裁が悪くつて行な  
かつた此方へ…… 今日一杯飲み乍ら久調で話をしやうが家  
の様子何うだい…… 留まあ…… 何とも有りません 權お静  
の何所かへ行つた然うぢやあ無いか 留下谷中町の仙台屋善八  
の方へ行きました 權居無の方が宜いだらう小姑といふ位だか  
らね…… 留居無の方が宜う御座います 權まし鬼又小姑とい  
ふ位だから居無いの滅法宜からう…… 宜からうけれどもま  
……一杯鬼又角飲んで…… 何だい疑はれたといふの 留疑ら  
れたといふの酷い事で御座いますお静坊が世間から聞いて来  
たのでせうが月足らすとか大宮又似て居るとかいふて先に幾度  
も来たので感づかれたのですが子造出来たのに嫌な淺岡の所へ

御簾屋騒動

彼んな市公の所へ何な苦勞しても貴方の所へ行つて居る譯に  
行きませんけれども貴方は困り居たいと思ふのです……  
手銅提てと言ひますが實に乗りたい玉の輿だが嫌な奴の嫌やよ  
手銅提ても好いた人といひたいのです…… 幾ら樂に居ても  
苦勞が有つて本當に勞いのですよ大宮さん人の心も察しないで  
此頃噂を聞けば吉原の玉屋とか笹屋とか云ふ家で大盛遊ん  
だ云ふのですが定めし宜い花魁も在つたので御座いませう……  
……貴方が可愛がられた人が何あ人かと思ひますと本當に浦山  
敷くてなりませんよ大宮さん…… 懊惱棘よ…… 權然う懊惱ん  
方が宜いよ仕方が無いから…… 懊惱ると云ふの能くさいから  
…… 留懊惱ずに居られません…… 本當又口惜くて堪りません  
權まあ…… 然んな事を言はず…… 留何うしても彼所  
よ居るの嫌ですから一層出て仕舞つて貴方の宅へ行きさどう御

御 簾 屋 騷 動

座いますよ 權然う乃公に言つて呉れて困るよ乃公の佐竹の家  
家來だから然うの不可無いから一層浪人をして何うかなつたら  
來ても宜いのだよけれども然うお前の様又言ふの不可のだよ  
.....此鳥越又幸い一寸した鑿劍者で田島賢三と云ふ者が有るが  
夫れ又今頼んで家を尋ねさせて居るから家が出来たら乃公も劍  
術で世を送らうか刀劍の鑑定で世を送るから.....尤も佐竹の方  
も首尾に能くさかから然うあつたら貴様と自由と會るし然うな  
りやわ市右衛門の家を脱して來た所が淺岡と乃公との大變も無  
い中だから何う斯うと云事が出来る者で無い.....留出來る者  
であいつて一時の愚半時も嫌あのですよ.....權然う御前に言  
なれての殆んど迷惑するが半時も居るの嫌だつて何うしたら  
宜いのだ 留どうしたら宜いも何んにも有りません.....何か宜  
い工風の有りませんか..... 權別に宜い工風と云ふ者の何れも

御 簾 屋 騷 動

さいが困つた事になつたさ..... 留彼の市太郎の相續をさせて私  
が阿母になつて居れば..... 權夫れぢやあ斯うしろ彼のお辭を  
殺して仕舞う仙台屋善八も行つて居るのを幸はひも向ふで殺す  
譯にも不可からお前が一旦家へ入れて遣つて夫れで何うだお辭  
が身軀が悪いのだから薬を盛ると云つて乃公の手の方又随分酷  
い奴が有るから毒藥を調合をして呉れたら一服で死つて仕舞ふ  
だらうと云ふのを聞いて慄然と震へたお留 留毒藥で殺すと云  
ふの..... 權時又依つたらお静斗りか市右衛門も其毒藥で遣  
つたら何うだ 留然うですわ..... 其お醫者の..... 權實の其醫  
者に困つて居るのだよけれども其奴が旨く行くか行か無いか分  
ら無へが..... まー今日の所で然ん事事を言つて居る所での無い  
.....と密々話をして居りますと 甲是れの大宮の旦那様暫くは  
目も揺りませんが私では座います 權私と云ふの..... 男へ

御 簾 屋 騒 動

エー……手前で御座いますと笑ひながら通入つて来ます所の人物の顔を見ますと是れだ誠と覺ゆる有る淺草三筋町に居ります真鶴仁齋と云ふ太鼓醫者で御座います中々其薬を盛るの下手ですけれどもお世辭の上手の方ですが昔しの傷寒論さへも讀めないので陳皮だの甘草だの大黄を入れて夫れを種々調合して此様物を飲して置けば効くだらうと云ふ險毒な醫者が有つた者で御座います然んな先生で御座いますから大宮の 權ハテ……何の用で来たのだらう……真鶴一鉢是れの御簾御用達の市右衛門さん所の奥さんでお留さんと仰しやるのだが拙者仲人をしたのだが何うか亦心安くして呉れ 眞ハッ…… 權何を笑ふのだ…… 眞ハッ…… 權嫌又笑ふぢやあ無いか…… 眞他人の知らず真鶴仁齋を詐うと言つて詐かれませうか…… 御兩名智慮の智謀を持つて敵國を則ち占領し及んと云ふ流石の

御 簾 屋 騒 動

大宮先生御器量の程恐れ入りましたイヤハヤ……何と申して宜いか譬い様が御座いません石田三成の計策でも是程で有るまいが敵國を要すと云ふ事の幾らも有ります市右衛門先生の婦人を云々なんぞと云ふの細工の流々承にれば佐竹侯で以て大分高名だとか云ふ事ですが是れからの帯剣して入らつしやるの止して仕舞ひれまして何れへかお店を構へたら何うで御座います 權私しも家を探して居るのだ…… 眞夫れでい幸ひ廣徳寺前より立派な家が御座います如何で御座いますか……お買ひ遊しませんか其處は去もと家で御座いますか……一寸善い家で御座います 權ハ……然うか……乃公が住む様な家の一寸庭の有るのが欲しいのだ 眞間取の工合と宜い貴方がお住むに極宜しう御座います 權乃公の刀劍の鑑定で送る積りだ 眞鑑定ですか寶に本阿彌も跣足です…… 淺岡の奥様手前の真鶴仁齋

と申す致意で御座います 留何うぞ何分御願ひ申します…… 浅岡の妻で御座います 権さあ…… 一坏遣つて呉れ 眞有り難い事で御座います…… 時又大宮先生 権何んだ…… 眞愚忠義を盡しますが一分又載て頂き度う御座います 権忠義を盡すが一分又載せると云ふの何だ 眞大宮先生…… 浅岡の毒殺一條…… 権エーッ…… 如何して知りつるかど顔の色青くなつて大宮権之丞もお留も驚いて暫し言葉も御座いません 眞幾等貴方がお隠しになつた所がも…… 不可せんと眞鶴仁齋が腹を突いた一言を吐きましたので御座います

第四席

星を指されまして大宮の小聲もなつて 大少つと進むが宜い 眞…… 貴様も金二百兩遣るが毒薬を旨く調合して呉れる事へ行

くまいか…… 眞夫れ…… 譯の御座いません可も不可も有りません早速に遣ります…… 用ゐる事の緩々と云ふ事に願ひます…… 大緩々遣つて見よお留の宜いか 留夫れ何うか致しましたやうと是れから三人で何を秘密を談じましたか分りませんけれど其趣向と云ふ者の無かつたが寛政の二年丁度三月の初まで格別の事も御座いませんでした三月の花見と云ふ此時分お留の花見も附いて仙臺屋善八も預けて置きましたお静は是れも今年十五にもありますから呼び迎ひましたがお静の花の色芙蓉の庭と能く申しますすが實又其飽ある事壁へ様も御座いません未だ小娘の十五とても色氣のたつぷり誰人が見ても此位な婦人の多く世の中よさい位で御座います事に今日櫻見の事で御座いますから麗しい縮緬の小袖を身纏ひまして唐緞子の帯を締め文金の高島田母親も作り飾つて市太郎と云ふ今年四年もあります子



御簾屋騷動

供を連れて計ずる向島へ出て参りました……上野の其時分最と盛  
重で御座いますから恰度秋葉の原迄参りましたが芝生で此處の  
遊び樂しむの屈強と遊を敷き主人市右衛門を始めとして頻  
欣んで見て居りましたが盃の櫻の花の飛び入る落花を欣ぶの忠  
度されども嬉しいと思ふの同じと市ハテ……面白き櫻で有る  
わい……と云ふ内もお留が昔の腕を鳴さんと取り出した三味線  
ツンテンツンチャンと引き始めますとお静が隠しく舞  
ひ振ふ此時お松と云ふ女中が松お妻君嬢様のお舞振の格別で  
御座います……留本當も旨い事ね！ 久旦那様久造で御座  
います……留お花さん美しくしいね 花然うで御座います……  
嬢さまの彼な方のお嫁も入らつしやるのですね……留お静の  
お嫁に行くんぢやあ無いよお舞さんを取るのだよ……サア……  
……お辨當を……是れからお辨當を開いて慈姑のさんどんと

御簾屋騷動

か又の玉子の厚焼とか種々の物を造つて居ります内も鯉こくを  
拵らへて来る市右衛門もお静も共鯉こくを造つて居ると大宮  
權之丞が百眼を掛けてヒョロヒョロしあがら大ヤア……是れ  
誰かと思つたら淺岡御一家で御座いますか此場御目  
掛るのハ頂上御座います……市大宮さん此人が仙臺屋  
善八の……大ヤア……然うで御座いますか……何れ又お  
目も悪ります……と其處で一抔飲んで土堤へ上つて仕舞つたの  
です其跡で仙臺屋善八も先へ別れる市右衛門は是れから土堤を  
ふら附いて竹屋の渡舟を渡りまして花川戸の我家へ歸ると云ふ  
と市右衛門の立ての苦痛お静も共苦痛で居りますから留何  
うしたので有りませしやうま……此苦痛……早く醫者をば……  
……と云ふ此時大宮權之丞が知つて居つたが醫者の眞鶴仁齋を  
ば過ぐ都合能くも参り合せました以前から仁齋の此家も来て居

御簾屋騒動

りまするから 仁「今日の花の戻りで御座います……と顔を出す  
と 番恰度宜い所へ……と番頭がつかまへます女房のお留の  
留「オヤ……先生大變で御座います……急病で御座います……  
見て下さいと云ふから上へ上つて市右衛門の脈を取りお留の脈  
を取りますが 仁「これの容易あらん……頼でも無い事で御座い  
ます物が當りて有りますから下しさへすれば宜しからう……早  
速調合ましやう與毒劑も御座いますからと薬を二服と速く人を  
家へ遣つて煎じ薬を取り寄せ飲せませう……お留の方何うやら  
能く相成りましたけれども市右衛門次第……弱つて参りま  
したからお留の半分狂氣の様になりまして 留大變だ何うした  
ら宜からう……と云ふので神田臺所町の辰巳屋の主人と仙臺屋  
善八を呼んで親類協儀をして宜いお慰者へ掛けると云ふ此時の  
多喜何某と云ふ將軍のおひと云ふ此方へ手を廻して見て貰ひま

御簾屋騒動

したけれども是れとてもお静の方の助かる全く物當りか何かで  
味噌汁の中又悪い者が有つたのだ市右衛門の助からんと云ふの  
ですが市右衛門の目数を經るまゝ次第……又悪くなりました  
今の際又仙臺屋辰巳屋お静を呼びまして 市鳥渡皆さん此所  
へ来て被下まし…… 留「確りして呉れ無ければ不可無いよ 重  
確りしたくも何うしたくも此身軀での仕方が有りませんが……  
私に何か怪しい物を食べたに違ひ御座いません……夫れ又彼の  
お留あの悴の市太郎可愛事可愛う御座いますが大官權之丞が  
世話ですから黙つて居りましたが世間の話で何うある事か分  
りませんがお留と市太郎の幾らかの財産を分けて何うかお遣  
り被下まし私にお静に此財産を皆遣るので御座いますから仙  
臺屋さんと辰巳屋さんと何方の方にも氣に入つた聲さん何  
うぞお取りあさつて被下ましよ何分お願ひ申し上げます……此

御簾屋騷動

事を改めて貴方方願ひますよ…… 静然んなどを言ひないで  
確かりあさいましよ私がいづそ死だらお父さんの助かるも私丈  
け残ると思へば…… 無情い…… と泣き入るお静の手を取りま  
す市右衛門の市何うか此身上のお前立派よして呉れるよ心替  
りにして呉れていならんぞやと云われましたからお静が 静此  
家の継げあくとも宜う御座いますから…… 市イヤ…… 彼のお  
留と云ふ奴の悪い奴だから其所の仙台屋さん辰巳屋さんお頼み  
申しますと咽がゴロゴロなりまして来ます其内にお留が参りま  
す種々介抱をして手を盡しましたが功の有りませぬ寛政五年三  
月三十日の日にとうとう死んで仕舞ひました…… 己も此講談の  
私が兩國の福本で演じました其時の斯うの申しませんで御座い  
ました此お静斗り毒を盛つて殺して此市右衛門さん大宮權之  
丞の手で本謀造と云ふ者が殺したと云ふ様も申しましたが……

御簾屋騷動

此親族が居やうと思ひあかつたのです御簾屋淺岡源八郎と云  
ふ御方は是れも此御方から恰度四代もある御方だ然うで御坐い  
ます未だお年の然んかに不可様で御坐います當時仙台市大刀町  
百九十二番地にお在で淺岡源八郎と云ふのです其又御親族が小  
石川指ヶ谷町五十二番地も居られました是れ山浦と云ふ御方  
で居坐います其所種々書物が有るからと云ふので私其所  
へ上りまして書物や何かを拜見しました夫れから講談を急々替  
ねましたので御坐いますから私其是れ迄講談致しましたのとい  
此速記を御覽よあると違ふと仰りますかも知れませぬから一寸  
申して置きます前よ此お静さんが誠も弱柔で仕舞はは惜けあ  
い旨目よあつて仕舞ひます様も話をしましたが中々然うで御  
坐いませぬ活潑らしいのです此方の私が饒舌宜う居坐いますか  
ら夫れ故講談を實説と云ふ頭を置きましたので御坐いますお静

四十六

父親の相果てました後、涙の種其儘遠くもあらん總泉寺が菩提所で坐いますから此へ葬つて仕舞ひました七月の寺参り是れとても別段の事有りませんがお静の何となくお静を針の進み居る様と思つて使ひますがお静の柔順故何とも申しませんけれども食物や何かの油断をせず、静父さんの死んだのも私の苦痛だのも奇怪しい者だ……と思つて居りますからお松と云ふ女中を頼みとして居ります或日お松を連れて淺草觀世音と静と寄りまして觀世音からス……と参りますとするど充分と酔ばらつて居たの、眞鶴仁齋で御座います、仁是れは何うも娘さん恐れ入りましたか、静オヤ……何誰かと思ひましたら其方の眞鶴さんで……大層お酔いで御座いますね……仁酔うたも……かたなし何うも何とも言ひ様が御座いませぬ……何方へ娘さんのお出で御座いましたか美麗で居らつしやい

四十七

静何んですね……仁實と美麗で……阿母さん何うですか、静ハイ……も一無事で御座います、仁父さんがお亡かりで身が弱りましたな、静ハイ……血が無くなりまして身が思う御座います先生の御座で少つどの宜いので御座います……多喜先生が折り……お出で御座いまして身が随分大變と悪い血が増したと云ふので御座います、仁餘程悪い血が殖ねたらう……ぢやあ兎と角娘さん甚だ如何で御座います観音様は参詣あら此山の手前一寸心安い水茶屋が御座いますから其所へお出被下さい……静イエ……何うも然ういふ所へ私に立ち寄りませぬ……仁然うでは座いますか……貴方脈を見なければ不可せんと存じて……静宅までお出被下さいませ……仁宅まで……幸ひ此馬道の角と菊屋といふ家が御座います是れの手前が別懸では座いますから其菊家の二階で……

御簾屋騒動

松菊家といふ家の成程待合で座いますね 仁並の待合で座  
 坐いません尤も昔し此待合といふ者の喧嘩の仲人や何かの  
 来りまする其家で座います仁齋此所あればと思ひまして  
 仁夫れで其所へ参つて脈を見て頂きましやう……松や一緒  
 又上つてお呉れ……松宜う座います……と夫れへ来て頼て  
 三階の櫓子の所へ来ます何の氣なしにツカ……と上る 仁  
 お松どん甚だ濟んがな自宅へ行つてな彼の一寸お妻君もお出を  
 願ひ度いと言つて被下い嬢様のお身躰の事に就いてお妻君もお  
 出を願はなければならぬのだ……松然うで座いますか  
 …… 仁是非お出を願ひなければ無らぬのだ……松夫れで  
 の行つて見ませうと自分何の氣なしで行くお静の二階で今も  
 松が来るだらうと思つて居りますと仁齋計り…… 静オヤ……  
 仁齋先生何ぞは用で座いますか 仁お脈を…… 静何うぞお

御簾屋騒動

願ひ申します……松…… 仁お松どん今一寸買物よ……  
 静アラ……嫌お松で無いか…… 仁お脈を…… 静何うか  
 御覽被下い…… 仁ハ……と言ひ乍ら舌を見兩手を搦で是れ  
 から寐かして置いて腹を撫て居りましたが何思ひけん仁齋の腹  
 を撫でながら突然抱付いて 仁嬢さま實の眞鶴仁齋の貴方に疾  
 から懇れて居りましたと云ふから 静アレ…… 仁齋先生嫌です  
 よ……と退ぞけましたから 仁貴方の阿父さんと一緒に二月三  
 十日又死ぬ生命を此仁齋がお助け申したのだが私の言ふ事を聞  
 かなければ貴方の生命の無くなりませう…… 静仁齋さんよし  
 て被下まし然んな事仰しやいますか貴方と私どの年も違ひます  
 し貴方の御妻君が座いますもの…… 仁家内に出します……  
 離別します貴方と一緒にになりたう座います貴方となれば死ん  
 でも厭ひません……と云ふ此言葉の様子をお静が考へて合點が

御簾屋騒動

いかに流石の伶俐の娘ヒツマリ……と座つて膝より掛つて  
静先生貴方の私の生命を助けて被下たのの本當では座いますか  
仁夫りやわ本當ですよ…… 静何う云ふのです話して被下な  
仁夫りやわ話をしても宜うは座います 静お父さんを誰か殺  
さうと言ふ様な事を言つたのですか…… 仁夫りやわ然う云ふ  
譯で有りませぬ…… 静然う云ふ譯で無いと云ふの……本  
當に話をして被下な其代り私も貴方の爲めは此所で帯紐解きま  
すから……と確か然う云ふ此一言を聞くと仁齋の外は事打  
ち忘れて逆せしてしまつて 仁へ……ヘ……貴方が然  
う仰しやるどの辱しけなし……と仁齋のお静の帯又手を掛けや  
うとするから 静仁齋さん私しを助けたと云ふの何うしたの  
です…… 仁生命を助けたと云ふの折うでは座います……貴  
方の父さまを大宮権之丞と貴方の阿母さんのお願みで此仁齋が

御簾屋騒動

花見の折は鯉こくへ……と言ひ乍らお静の帯を解うとする時お  
静のカツ……と思つたが氣を落付けて 静然んから父さまの死  
んだのもは病氣で無くつて大宮さんと阿母さんが頼みで貴方  
が毒を盛つたのですか……お静者と云ふ者の人の病氣を癒す可  
きよ殺すとい……と懐中よ持つたる小刀をツラリ……と抜いて  
今しもお静の首たまへ仁齋が帯紐を解いてかなり附こうとする  
のをマハリ……と切り附けたから 仁ア……と驚き逃げ様  
とするのを 静此殺せぬが……と又も切り掛けたのでは座いま  
すから仁齋の狼狽て馬道の菊家の二階から素裸躰で襦衣一つ表  
へ飛びだしたが……裸体で妨主がなる者か……は是れから始ま  
つたのですお静の帯を解いて縮緬の衣類で顔色の變つて突然り  
二階の屋根へ出たのですから見物……甲女が……女が  
刀を持つて出たと大騒ぎ自身番から金棒を持つて駆けて来る此

御簾屋騷動

騒ぎの所へお松がお留を呼び又行つたが居無くつて歸つて来る  
……お静の屋根も居たが下へ降りて来て真鶴を追ひ駆け様とす  
るからお松の驚いて後背から押へると云ふのですが此納りの如  
何になりますか

第五席

孝女お静の悪漢大宮權之丞淫婦お留の兩人が現在父の市右衛門  
を秋葉の花見に引き出して已と共々毒殺して死出の旅にやらん  
とせしが自分は無事に世に残りしが悲しや父のその毒の爲め無  
惨の最期を遂げし事をはじめて真鶴仁齋より残らず談しを聞き  
ましたゆゑ精神狂つて兼ねて母より譲り受けた護身刀の貞宗の  
命にかへる寶の品も仇の餘類仁齋を菊屋の二階で切り付けまし  
たゆゑ 仁此のたまらじと逃げ出しましたを 静汝やらじと屋

御簾屋騷動

根まで追ひかけすでも飛び下りようとする處へ下女のお松が後  
から抱きとめまして 松嬢さまマアお待ち下さいまし 静イニ放  
してお呉アノ仁齋をアノアノ隣者をも縮緬小袖着た儘あせるを  
呼び升とたん菊屋の息子の龜吉といふ遊人が登つて参りまして  
○これのマア大變と着衣を脱ぎ棄て赤裸々なつてお松が抱き  
とめて居る脇から短刀をもつて居る手をおさへ ○マアお危険  
うとせへやすお嬢さんと無理に短刀をもぎ取りお静の帯際に手  
を掛けお松と俱々二階へ漸々引き入り込ましてござい升がお  
静の怒つてなほ飛出さうでござい升から龜吉が抱いて居ります  
るお松が 松どういふ譯ですか仔細を私もおはさし下さいその  
様子も依つて仁齋を此家の親方頼んでおさへて貰ひますか  
ら此氣をおちつけてお在下さいモ嬢さまモシ貴嬢と水よ薬よ

御簾屋騷動

とお静の氣の鎮まるやうに致しましたゆゑ漸々氣が落ちつゝ  
まして只茫然と静松や……女の身で飛でもまい事モ私を抱  
て居るの誰 龜菊屋の龜でござへやすが全躰何でお嬢さん  
あんなにお怒りなすつたのです 静まつやアノ仁齋が私にい  
らしい真似をして帯を解き而して阿父様を殺したと云ひかけ  
したが恰例のお静ゆるホツト氣がつき 静イエアノ阿父様が死  
んだのも病氣とい云へ無理に仁齋がお酒をすゝめたり何かして  
あんなまり遊ばしたから定命より早く死にそれだも妾にいや事  
をするから腹が立つたゆゑ天窓を一寸研つてやつたのだヨ 松  
それの悪い仁齋年も耻ず淫奔しい事なと仕かけお醫者の癖  
よく研つておやんなすつた妾から喰ころしてやりまするので  
ございます 龜何しろ太へ醫者坊でスこんあ人形のやうにお嬢  
んをつかまへわるい事をしようあんでへ手前の面ア見やがれ鬼

御簾屋騷動

門除けの瓦も似て居やがるくせよせめて龜吉位の御面相あらま  
だしもだが呆れがかへつて蛙が呆れるヨ 松あんでス親方お嬢  
さんも氣分がよつばよとおあり遊ばしましたゆゑお宅へ親籠  
で御歸り遊ばせ私がお供いたし升から阿母様もまた色々私  
から申上げ升から親方お禮の後で致し升からどうかお親籠を一  
挺おあつらへ下さいまし 龜ナニお禮と云ふかお嬢さんをお抱  
き申したので澤山でござへます親籠を云ひ付けて参りませうモ  
ウお氣分なようござへすかと申々面白い男でぬいであつた衣服  
を引つかけ下へ参りますあとお松の 松お嬢さま私も大方に  
推して居ります事よると今度の事からお親類へお預けな  
ど仰せがありましたら黙つて阿母さんの御言葉にしたがつて逆  
はず御出あそばせアノ坊ちゃんも家督を取らせたいばかりであ  
るが御邪魔なのでござりませうそれで仁齋をたのんだのだら



うと私の考へ升左もなければなんぼ好色でも娘さまと對して  
んな事を 静松や何にもお言ひでさいみんお宅の耻を他へ報知  
るやうの者これといふも阿父さんが大宮さんに欺されたからで  
すと話しのうちには龜吉の二階へ参りまして 龜お駕籠が参りま  
したお嬢さんお心持の 静スツカリ直り直りました親方さん種々御  
世話さま 龜どう致しまして 松實にすみませぬいづれ御禮に  
参りまするといふうち下から女中が二人上つて参りまして 甲  
顔のおやさしいが強いことよ 乙ほんせうよ左様から 龜途中  
お氣を付けあすつて 三人皆さんによるしうと菊屋の二階を下  
りお静の駕籠にのりお松の脇へ添ふて御簾屋の店先に駕籠をお  
ろし臺所の方からお静のそこへ 遣入り自分の部屋に行き升  
お松の駕籠やに代を遣りまして手代の金藏を呼び 松おかみさ  
んの御在かと尋ねましたところ 金まだ御戻りのないと答へま

したから 静まづ安心と臺所よりこれも自分が居間へ参り升を  
臺所をはたらくお玉といふ婢がお松にむかひまして 玉お松と  
ん今馬道でお嬢様が亂暴しあすつたつて血だらけで御醫者の仁  
齋さんがござつて大宮さんと咄しをして仙臺屋さんと辰己屋さ  
んを呼びよやんなすつたお内儀さんの土藏の内へ仁齋さんと相  
談してござるワ 松それでも店の重蔵さん又聞いたらまだお内  
儀さんの御飯りはあいと云つてございましたがいつの間にお飯  
りあすつて 玉店から何時でも御遣入りあさるを今日の内庭口を  
開けておいて其外からもどつてお在なすつてそれで今日の内庭の御  
醫者さんの話し何でも宜い事であり升まの 極それのお嬢  
さんがないまた内々のお咄しが分つたら聞かせて下さいましよ  
玉何でもお嬢さんの御身にかつたとならきつと報知ますると

御 簾 屋 騷 動

その儘玉の臺所の窓の前は行き火を燃して居りますそのうち  
日ノドッブリ暮れる燈火を點る頃となりますと辰巳屋佐吉仙臺  
屋善八兩人が這入て来るついで大宮權之丞も御簾屋へ來り彼  
是夜の六ツ半時頃より残らず挨拶をして土藏前の十疊の間へ互  
ひに額を鳩めましたこの時女主人のお留の結城縞の衣類は黒の  
唐織子の帯をして髪を立派にひすび後家の状とい思へぬ紐り  
とさいましたたが醫者の眞鶴仁齋をつれて此席へ出ましてござい  
升仁齋の小紋の衣類は黒戸博多の帯黒紋付の羽織天窓を切れ  
白木綿にて巻付居ります居あらんだ親類の極氣まじめな人た  
ちゆる太織の衣類唐綾の羽織ぐらゐで仙臺屋も辰巳屋も紋附で  
ございませぬ獨大宮の佐竹の浪人で少し色男の方ゆるに鼠紋  
附黒七々子の羽織筑前博多の帯に御仙平の馬袴を穿き床を後に  
して控へて居り升この時お留の人々にむかひまして 留さて今

御 簾 屋 騷 動

日御親類さま皆様をお招きいたしましたの外でもございませ  
んが大變が出來ましてこのは簾屋の家名も疵をこゝろですか  
なものがつくか知れませぬ故御相談も預りたくと存じて御出を  
ねがいましたのでござい升が何を申すも年のゆかないお静の事  
ですからどうでもよいと捨ておきたい處ですが捨ておけない事  
で無餘儀皆さまに御足勞をねがふやうに相成りました外の事  
もございませぬがこの仁齋さんの事でございませぬ 仁眞事  
様も面目ない次第でこの年でお静様も對し別して醫者であり  
がらど立腹もございませうが實にお静さまの用心を探り立派  
なは養子を世話いたしますに付き一寸試験的が大騷動の種  
と相成りました次第でとべつしやべりませぬから仙臺や辰巳  
屋の顔を見合せまして眞鶴仁齋の言葉のわからん所がいくらも  
あり升からだまつて居る大宮の口をひらき 權仁齋殿貴君の仰

御 簾 屋 騷 動

せの唐突で實に何だか分らん静さんよかすり合つた事なら事で  
くしく話してもらひたいといふ事ですか致から棒の話しで  
の權之丞も善八殿も佐吉殿も何事だか事情が知れんでござら  
ぬかどうか事由のわかるやうお話し召れそれよお留さんも心を  
しづめては簾屋の家よかすの事なら委しく仔細をおはなしあ  
さい他人の居さい親類と某ばかりだ如何でござる各々 善これ  
の大宮先生の仰しやる通りで隠すことおしよ明つばあしで實際  
の事をおはさし下さいまし 佐仙臺やの申す通りで一昧此度の  
事何からはじまつたのですか三人がいろくど申升たゆへお留  
も膝をすくめまして 留實の斯うでござい升お静もモウ十五で  
ござい升からは親類へも相談して好い婿を貰ふ考へで内々眞鶴  
先生にたのんで置きました處此度坂倉屋といふ藏前の札差の番  
頭で坂倉屋の殿様をもらつて居る三間町坂倉や平兵衛の二男で

御 簾 屋 騷 動

小三郎といふのが今年二十で男が好くて學文もあるといふので  
それにお静を途中で見送つて行つても貰つても好いと仁齋さ  
んに頼んだといふ事ですお静に内々たづね升と少し望みもあり  
阿父様が死んで三年立ちませぬから否でござい升と斯う申しま  
したからそんならば爾うと實の思ひました此頃で十五でもま  
せて水白粉だとか伽羅の油だとか帯もこれかあれかと取りかへ  
引かへ締めますゆゑハア變だぞ探つて見ますと外は男があつ  
てそれを慕つて居るまだ下紐を解いた事由のさからうかと斯  
う聞きましたたゆゑ夫れで眞鶴さんによく嬢の氣に入りゆゑ胸を  
さいてもらばうと斯うおもひまして今日馬道の菊屋といふ待合  
へお静を親音さまから戻りによらせ眞鶴先生へ會せ心をひかせ  
たら眞鶴先生が少し降してお静の帯を解たとか言つて帯の中へ隠  
して持て居た短刀で斬り付けてこんかに疵をつけて馬道近邊大



六十四  
權「イヤその分疏の後、に聞くといたしお松とお静さんを此處へ  
呼んで話しを聞きませう伊達騒動なら仁齋先生の原田甲斐とい  
ふ役廻りでお静さんが伊達安藝か子 善「お静さんの差しづめ酒  
井雅樂さまだ 留「ほんにお人が悪いお方はかりです子お玉やお  
松と嬢さんもちよつと親類がお出でゆゑすぐ此の座敷へ来て  
下さいと爾う云つておいでと申し升るとお玉の座所へ居りまし  
たがこの談判が始まるとそつと忍んで障子の外へ出て居たを早  
くもお留が知つて申しつけましたゆゑギョツと思ひましたか  
玉「ハイとこたへもお松もまらせましたゆゑお松もブルブルふる  
へ 松「サア嬢さんとお静を促がし土蔵前の一間へ還入つて参り  
ましたお静の貴と鼠の本場琉球の衣類に銀鼠緞子と紫緞子の縮  
帯をして島田と結び上げ人々の前恥しく繼母お留のソト後の方  
に座りましてござい升がお松の茲ぞ一生懸命と今の様子を見て

第六席

居り升方今さらば原告被告證人参考入判事檢事と役者揃ひで  
さい升そもは簾屋の奥座敷で仙臺屋と辰巳屋が大宮を開人とし  
てお静を調べてお留仁齋へ向け如何ある談判を開き升か悪漢大  
宮がこれ等を傍聴して何をか巧み升やそれの次席までのは樂し  
みにいたしませう

所「花川戸の簾屋の奥座敷仙臺屋と辰巳屋の兩人大宮權之丞  
とお留と居る所へ下女のお玉やお松が障子の外へ居つて相續人  
のお静を内へ入れましてございますがお静も於ても何も於き  
ましても針の差し座します様もございますか何うしたら宜から  
うかど種々考へ胸へ手を當て母の脇へ座りました所迄伺ひまし  
たが此時お留の心中より此お静の年に行かんけれども後には私

御簾屋騒動

の爲めに何んか弱ひをする事あらん今の内何かして仕舞ひたい  
者だど云ふ考へを起しました表の何處迄も弱に 留お静……  
お前の今日馬道の菊屋で何故真鶴仁齋さんを切つたのだへ……  
其切つた譯を詳しく言つて呉れなければ不可無いが何う云ふ譯  
で切つたと云ふ譯を詳しくお話し 留ハ……と返事をした斗り  
ですから仙臺屋が 仙お静さん阿母さんの今言つた通り少しも  
恐い事無いから遠慮無く真鶴さんも居るのだから斯う云ふ事  
をしたあらしたと云ふが仁齋さんの立派なお醫者さんだ者ね！  
……辰巳屋さん 辰巳然うです 仙お静や本當の事を言つて呉  
れ無くちやあ……かまや仕無いから……仁齋さんお前さん手込  
め仕様と云ふお前言つてお呉んささい是れを聞いて居た仁齋  
仁是れの酷ひです辰巳屋さん何で手込めに致そうなど言つ  
たが大宮權之丞が居りましたが 大仁齋さん元來醫者と云ふ者

御簾屋騒動

未十五もあらん處女をば待合へ運込んで戯れると云ふ語が  
有りませるか夫れ何う云ふ事か知んお静さん大宮權之丞も此所  
に居りますから本當の事を仰やいお留の大宮の顔をヒツと見て  
大宮さんの變お私の爲めを思ふてお呉で無いのか夫れとも亦何  
か考へが有るのかとお静の方を見返りまして 留お静や皆さんが  
ア……仰るのだから……阿母さんの前だから此所で言つてお  
仕舞ひ 留夫れでも何でございませうから 留夫れでも何でござ  
いますと云ひ 留私が悪うございませう菊屋の二階はお松が一緒に  
居て呉れまして然うしてお松が阿母さん用が有ると云ふて出  
行きました跡で仁齋が種々お事仰しやつたもので有りますか  
ら私ハッ！切りました 留何を前言ふのだよ仁齋さんが種々  
お事仰しやつて何んか事言つて切るのだよ……何んな事を仁齋  
さんが 留仁齋さん私を縛へて無理事を言ひ夫れから私の帯

を解いても……手込め仕様としたので有ります……夫れ斗  
りでございませぬ現在の彼の仁齋……と目を怒らして母親  
の顔を怨めしく眺め情無い父さんを秋葉の原で毒を盛つて殺し  
たの貴方がお差圖と胸又は充分思へども菊屋の二階でお松の  
言つた言葉も有り是れと云ふのも市坊と云ふ者が有れば私さへ  
此家の相續人にあらざれば宜いのだが阿父さんの敵の此阿母  
さんと大宮様之丞さんも事に依つたら一つ腹でんどの思ひさが  
ら口への皆無出ません只先立つの涙斗り 静阿母さん私仁  
齋さんが悪い者で夫れも私が気が少しく狂つたので逆上たので  
有りますから夫れで短刀を抜いて切つたのです何うぞ勘忍して  
仁齋さんとお謝罪して被下仙臺屋の 仙夫れのお前さんが然う  
仰れば仕方無いけれども逆上させるの仁齋さんが宜く無いの  
だよ……お前さん逆上る様お事を仰つたので有りますか 仁

……恩老ナカク 然な逆上る様な事申しませぬ殊も帯を取  
て嬢さんが承知あさつた事でございませぬ 仙承知を……何を  
承知したのです大宮が側から 大オイ 仁齋さんが承知と云  
ふのにお前と寐る事でも有るのか 仁イー……然う云ふ譯で  
も無いのです……お嬢さんが此帯を解て見ると承知あさつた  
のでございませぬと云ふと仙臺屋が 仙帯を何でお嬢さんが解  
いてお醫者様も見せるので有りますか其事を聞き度い者で有り  
ますと……辰巳屋さん辰巳屋佐吉腕巻りして 辰お醫者様の癖  
に然んか馬鹿事言へますかサ……言の様に依つて辰巳屋  
佐吉の只置きませんせ……仙まあ お待ちあさいまし……  
仁齋さん貴方何うかして居りますか……貴方逆上て居ると云ふ  
が 仁愚老も斯う云ふ場合で有りますから逆上たか知らんが私  
を逆上てお突きになつたと云ふので有りますか 静私の帯を解

御簾屋騷動

ひて側へ來いななどと云ふのであります。此様も穢きお爺さん  
と一緒になれるものかと思ひましたし夫れで貴方が仰つた事餘  
り口惜ふ御座いましたから夫れで突っ氣なりました……何だ  
か私に此頃一寸と人を突きたく成ります。仁夫れの御座……  
御妻君斯う云ふ次第で留イーエー……私のお前さんの事と思  
ひませんが全く此子が氣が變かのでありますから何うして宜い  
か分ら無いのであります。夫れと知す私の養子を取りた  
いと云ふので坂倉屋の悴の小三郎と約束したのですが其取持  
の仁齋さんかのです。是れを聞いて居た辰巳屋佐吉の辰其事  
有ります。養子をするのも宜いのであります。本人が未だ能く  
承知をしませんのでせうが……仙臺屋さん貴君からお話を願  
います。仙夫れの御話の中であります。氣が狂つて居りますから  
お静まい宜い加減であります。其様お下らん話と云ふ者の

御簾屋騷動

有りませんけれども坂倉屋の小三郎が全くの人物で有つて見る  
されば夫れは養子にしても宜う御座います。けれどもまあ、お  
静の腹も聞かんければありませんから依つて是れに斯うさせ  
う今日の話も行ませんからお静の當分此仙臺屋善吉が連れま  
して私の家へ置いて少し身軀の癒る様もあつてから養子のお話  
もするとしませう……けれどもたつてと仰るされば又何とかお  
話をし無ければならぬので御座います。何うか當分私の方へ  
お預けなさつて被下様お譯まい参りませんでせうか。留夫りや  
あ宜う御座います。辰巳屋さんのお考の何うです。辰私の方の  
掛ひません然うして貴方お静さんをお連れさる積りですか。仙  
湯治までも行こうと思ふのですが先づ箱根七湯の内塔の澤から  
湯本彼所らの氣が晴れますから遊んで夫れから伊豆の熱海伊豆山  
等をぶらぶら参るやうして夫れから後又歸つて來て小三郎と



御簾屋騒動

……夫婦になるかあらんかと云ふの跡の事にしたら何うで御座います……其所の所私にお委せさるゝ決して貴君の御厄介にありませんから 留金子の出しますよ此家のお静の家で有りませすから 仙然ん所に少しも御心配なさいません方が宜う御座います……決して大宮さん 大ウーン……櫻之丞も至極宜しからうと存じます養子を取るよも十七と云ふても一二年位立つた所が小三郎と云ふ人物が當家へ参ると云ふ様な事があれば當分客人として先お静さんが全快して戻つて來てから 辰夫れん宜う御座います 留然う云ふ事あれば坂倉屋の方の私の方から人を遣つたして御親類中御承知あれば當分御簾御用の手傳ひとして静が悉皆り身替が快りましてから致しませう又此君でも來年でも嫁す事致しませう……仁齋さん貴方の御自分が行届か無かつたから其様事あつたのですから諦めるより仕方

御簾屋騒動

有りませせんお療治代然し上げますよ真鶴妙な顔をして 仁何うも早面目次第も無いお静さん戯れてま……ゑらい失策をしまして嬢さんの頭を下げるのを見て私の氣が狂ひや仕無い敵の片割だけのそもと思ひあがら血の涙ボタリ……と流して 静真鶴さん何うぞ宥して下さい……仙台屋の伯父さん私の松を連れて行たう御座いますから 仙松を連れて私の家へお出ささい……夫れぢやあ辰巳屋さん…… 辰二人で預る事又仕ませう 仙宜う御座います……夫れぢやあお松も神田へ二人で預かるに仕ませう……夫れぢやあ辰巳屋さん歸りませう……お松嬢さんと一緒に行け 松私は其方が宜しう御座います……お玉さん は跡に残つて嬢さんのお供して是れから参りませう 辰ければ一もね坂倉屋の息子と何方が見合でもすると云ふ事有つたれば一の見合でもさしてと斯う辰巳屋が申しますと 仙夫れも是れも

御簾屋騒動

身軀が快つてからの事さ。留夫れでは是れから御膳を…… 仙  
イヤ…… 歸りは清四郎で一杯飲み合ふと仕ませう…… 其所で大  
宮權之丞に於きましてはお留に言ふて是れから魚を取つて貰ひ  
夫れおりけり酔てしまひました扱てお松とお静の仙台屋へ駕籠  
又乗つて立ち戻りましたお留の跡取り片附けて仕舞ふ今夜の立  
ち戻らうとしました大宮權之丞夫れへゴロリとして居ります故  
留貴方の直是れからお道場傍で御座います久瀬で御座い  
ますから此方へ無しおさつていらつしやいまし…… 玉や松も居  
無い事あればお床を持つて来て此所へのべて旦那のお夜着と布  
圍を…… 私の次の間も寐るからと店の者も寐る様に言つて悉皆  
言ひ附けた通りに致しまする行燈の燈心を二本かよしてピツタ  
リと…… 障子を締め次の間も寢て居ります真夜中頃徐と起きて  
大宮の側へお留が来て 留一寸と起きて下さい 大ウー……

御簾屋騒動

留私ですよ 大ウー…… お留か 留お留かぢやあ無いよ……  
…… お前さんの不實だよ市坊を何うしても此所の家の相續人よ  
するのをお前さんの知らん顔してお静の肩をもつたりしたりす  
るから口惜いのですよ 大乃公とお前との間も出来た彼の市太  
郎是れを此家の相續人にするよ云ふのの實に耻しい譯だ…… 不  
愍者の先の主乃公も殺さうと云ふ様も量見の無かつたが市  
右衛門を殺さんければあらぬから殺したのだがお静の生命も  
別條無く助かつたが仁齋の真抜けのた親類がボツとして居る  
からだがお静が居て駄目だから地面でも賣つて仕舞ふとか目  
星い道具を家へ運で置いて此所を立つて仕舞ふ様もしなければ  
とてもお前の思ふ様も不可無いで 留大宮さん氣の弱い事を  
言ふ者ぢや無いよ 大貴様然う云ふが彼の病身の市太郎生長も  
覺束無いぢやあいか生長した所がまた何ん事もあるか其所

第七席

分らぬからまあ〜打捨つて置け生長も登東無いがま〜……  
成長して見なければ分らんから…… 留夫れも就もて二千兩も  
持參金を取れるのだから當分店へ置くも仕様と思ふのですが一  
寸見合させなければならぬのだから私も何とか工風するのだ  
が 大何うかして見合させ様と斯う思ふのだよ…… 其内にお静  
が湯治までも行つたら見合でもさせて來年の春とか此暮とか一  
遍然うして家に引き取つて小三郎から二千兩受けとつて悪い事  
が有つたら出して養子でもすると……

大 夫れぬ妙だ貴様もナカ〜 悪黨になりかすつたか…… 留  
お前の仕込みだ者…… 大 旨く言つて居るが乃公より貴様の方  
が餘程度胸か宜いや何んて言つて宜いか姫己のお百だよ 留止

してお呉れよ姫己のお百おんて…… 大 其話の天山と云ふ講釋  
師が旨く言ふせ…… 留も…… 然ん事何でも宜いが今夜  
の饅頭飲んでも…… 一 遍話を仕様と思ふのですよ 大 乃公の  
寝ひるから…… 留 寐かさ無いよ…… と大宮權之丞と何か秘密  
をしたか夫れありけりで有ります 扱て此方の話變つてお静の  
所町に連れて参りまして仙臺屋善八が尋ねました所がお静の別  
氣が遠つた所が御座いませんが逆上して居る様子に見えする  
から他の醫者を呼んで診察しようと云ふので其處で醫者に見せた  
所が血が少し高ふつて居りますと云ふのですから轉地療養と云  
ふて箱根にでも行つたら宜からうと云ふので御座いますから仙  
臺屋善八がお松とお静と夫れ丈を伴つて行くと政します自分  
の娘が御座いますから娘のお蝶と云ふのと四人で辰巳屋へも話  
をしまして是れから江戸を立つて箱根まで参ります…… 當時は

御 簾 屋 騷 動

も一……箱根さんと云ふの下駄掛で一才と参ります箱根所か  
靴を提げて洋服を着て靴を履いて居るから 甲何所へ君のお出  
で御座います 乙僕は是れから英國龍動へ赴向て女皇六十年の  
マイヤモンド式を拜観して然して佛國へ行き露西亞の聖彼得斯  
堡へ赴向て舊年の大禮の跡を見て米國へ参つて米布合併談を聞  
かん……と一寸靴一つでお出掛になりませすが其以前然り参り  
ませんから送つて品川迄十人も参つて此所で分れました其所で川  
崎へ泊つて女の足で御座いますから仙臺屋善八は神奈川へ参つて  
神奈川の玉屋へ泊つて翌日の藤澤へ泊つて遊行寺を拜見して江  
の島鎌倉と云ふのですが江の島丈と云ふので名代の蛭子屋でな  
よか一晚泊つて取つて返しまして又藤澤から小田原まで参りま  
して小田原で一泊して翌日箱根の塔の澤へ参つて一泊も及んで  
木賀の龜屋と云ふ新湯が御座いますして箱根七湯を彼方此方見

御 簾 屋 騷 動

物も及びませすが夫れ山水明媚とか或の寒涼暑を知らずと云ふ  
のも有りますけれども實は彼の位宜い所の御座いません湧き出  
る湯と云ふ者の左のみ熱からず温からずと云ふので特は其樂し  
みと云ふもの寂々として霧々と瀧の落ちる音價値千金で御座  
います此龜屋の二階を借りたが紳士淑女が只今の様は行くので  
有りません夏くなりませんと人も参ります左のみで御座い  
ません炎熱焼が如き丁度只今の八月舊曆の七月一ぱい恰度只今  
の九月舊の八月の初め迄居りましたがお静も大分心地の宜い様  
で御座いますから今日の薩摩の中飛白の單衣物に給子と絹の腹  
合せの帯を締めまして涼しさうな團扇を携さへ島田も頭を結つ  
てお松と二人で以て龜屋の二階から降りまして諸方のお湯を轉  
つて歩さませお松に於きまして鼠白の單衣物も綿縹子の帯を  
締めまして是れも一緒参りまして瀧の前まで参ります 松

御簾屋騷動

さんく……… 静何か用かへ……… 松宜い瀧で御座いません  
か……… 静何遍見たつて宜いね……… 松何だか立派で御座いま  
すね 静此所の話を聞くと秋よなると紅葉の色が大層能くなの  
て本當よ野猿の聲を聞くと云ふ話しだね……… 松鹿の聲も折々  
はすると云ふので御座いますか 静夫れも然うだけれども餘り  
山計かりで面白く無い様よ私思ふよ江戸へ歸つてお芝居でも見  
たいわ 松本當よ然うで御座います私も何うか芝居が見度御座  
いますか……… 私ハ關三十郎が好きで御座いますよ……… 松本當  
よ好きだけれども關さんから見ると海老藏が宜いは……… 松貴  
方海老藏がお好きにあつて彼んな目玉の大きな餘り宜い者ぢや  
わ御座いません 静夫れも就目玉と云へば家の阿父さんも目  
玉が大きかつたね 松海老藏とお父さんとの違ひます 静阿父  
さんがお亡ありあさつて今頃阿母さん何して居るか大宮さん

御簾屋騷動

と阿母さんと疾から深ひ中で彼の市坊も大宮さんの子だと云ふ  
事ハ疾から知つて居るのだよ……… 一層市坊に家を遣つて私ハ斯  
う云ふ山奥に居たいと思ふの……… 何うだらう 松然うで御座い  
ます然うあさつた方が宜う御座いませうよ相續をあさつて又飛  
だ事にもあるかも知れませんから一層然うあさつた方が宜う御  
座います 静世の中の事を諦めて仕舞つて伯父さんにお願ひ申  
さう 松江戸にお出でになつても閑静の柳島とか向島の方とか  
三河島の方へ引込んで仕舞つて尼法師におありなさいませれば  
私も一緒に 静然うお言ひだけれども好いたらしいあんと言つ  
て居る様でハ駄目だよ 松夫れも然うで御座いますねと話をし  
て居る所へオッ……… と來ましたのハ年齢あれば漸々二十歳よな  
るかあらん立派な男で御座います色ハ白く鼻筋通り眼ハ冷しい  
人で御座います極宜しい本上布の雨滴飛白の帷子と鏡前の緋襦

御簾屋騒動

上の博多の帯を締め結の羽織を着用して然うして雪駄履きで  
甲何うだい宜いさんだな………瀧ぢやあ無いかするど廊の所へ待  
つて居りますのの手代の様な風で小倉の帯を締めまして 手然  
うで御座いますな……… 若今夜の龜屋よ泊つて明日又江戸へ行  
うが歸りの草鞋掛で行う 手夫れも宜しう座います………若旦  
那此のなんですれ龜屋に来て居りますのの貴方の御養子になら  
つしやる所のお嬢さんが 若余計な事を言な……… 手向に美  
女が出て来ましたよ金魚落鴈秋月傾家……… 若何だ金魚落鴈秋  
月傾家だへ 手能く言ふじやあ御座いませんか金魚が落鴈の襟  
な駄を食つて 若落鴈の駄と云ふのの有るまへ秋月傾家の………  
手秋月で傾家と云ふのの女の子 若詰まら無い事を云ふな………  
……… 美しい女だなどじつと見たが是れお静の後養子も相成りま  
する坂倉小三郎で御座います尤もお静の此男と添ひ送げるなど

御簾屋騒動

と云ふ事其頃更御座いませんし又知りませんのですお静此  
方を見て 松嬢さん御覽なさい美しい男が 静又始まつたよ美麗  
な男さへ見れば美しい人の何のと馬鹿な事を………とじろりを見る  
と冷しい小三郎の様子 松オヤマア………彼何所の息子だかな  
立派な………嬢さん彼の方ならね一苦勞して尻になるのを止めま  
す 静馬鹿な事をお言いで無いよといふ時方々へ玉子色の紋付  
の衣類に袴を附けられた是れは年齢二十一もあらずと云ふ色  
の左のみ白からねどもでつぶり肥満て背の余り高くあいで雨  
刀を帯びて笠を携さへまして草鞋掛よて其所へ来りしお武家最  
と立派なるがじろりと見て 静ア………彼のお武家さん………  
と思へば此侍もお静の様子を見て 侍ナカく美人だはい何れ  
の娘で有るかど計らずも顔を詠めて莞爾彼の侍士が笑ふとお静  
も莞爾坂倉屋も莞爾三人で六ッこり笑つた其儘お静の耻かしく

御簾屋騒動

あつて龜屋の家へ這入つて仕舞ふと彼の侍士も龜屋へ来て侍  
今夜の何うか一泊を致したいから 旅お一人旅行で御座います  
か 侍一人旅行で御座るが今度餘儀なく國表へ参つたが立戻つ  
て来た所で有るが先年當家へ泊つたのだ…… 旅何誰様で御座  
いますかお見忘れ申しました 侍拙者の備前岡山の池田侯の  
士で 旅池田様の御家來様で御座いますか…… 御姓名は何と仰  
被ひまするので御座います 侍池田頼母の身内で池田格太郎と  
申す者で御座る 旅池田様の御方様で 侍當家の主人の存じて  
居る筈だ……と云ふ途端に二階から仙臺屋が降りて來ました  
が パツタリ顔を合して 仙オヤ……何誰様かと思ひましたら是れ  
の備前家のヘム…… 池田格太郎様で御座いますか御親父様の  
毎度御目に掛りまして善や貴様の家へ遊び参ると仰ひました  
が池田の儒者で聞かを取つた所の池田善右衛門先生の御子息様

御簾屋騒動

……御見忘れ申しました 格拙者も此度の江戸へ少し修業旁参  
るので有るが劍術柔術を修業せんければならぬし又學問も修業  
せんければならぬから 仙まあ……其所でお話になりませ  
んから先づ此方お遣入り被下いませし此時お松の櫓子段を降り様  
として様子を開きましたから飛んで参りました 松若し……  
…… 嬢様貴方を考へて居らつしやいますのですか 静別段は何  
も考へて居無いですよ 松貴嬢先刻のお武家様を伯父様が知つて  
居らつしやあるのですよ…… 備前の御家來様で御座いますよ  
静お名前も 松能く聞かせませんでしたけれど池田何とか  
仰やつて…… 静備前様で池田を名乗ると云ふの余程の御方  
だよ 松池田伊丹とか 静お酒ちや有るまいし 松今其御方が  
御出なりますよ 静ア……恥かしいね……此方の單衣ちや  
ア耻かしいから絹を出してお呉れ 松紹の方で御座いますか

八十六  
 静然うで御座います……鏡を出してお呉れな……金盃を、松お  
 粧りを……と云ふ内は仙臺屋がお茶を入れて、仙お松……お静  
 さんを連れてお出……お松の、松嬢さま此方へ……と云ふお静  
 の悉皆知りお化粧をして夫れへ出まして……  
 静始めてお目に掛  
 ります……仙臺屋善八も、仙縁者の者何うぞ又お心安うと云ふ  
 内は色氣も何も御座いません善八の娘が、娘お静さんの耻か  
 し然うに惚れて居るので有ります、仙馬鹿事云ふな……子  
 供より困りますと云ふが彼の池田格太郎も温厚の人で有ります  
 から、格イヤ、子供おと云ふ者無邪氣で宜い者で……一風  
 呂遣入りませうと出て行きました、小三郎と小三郎方の雇人で  
 居りました所の三造といふ二人が休んで居ます所へ大宮權之丞  
 が来て、大、小三郎さんお前さん氣に入つたら仙臺屋へ話を仕様  
 から……小御願ひ申します……  
 大、夫れで何れ江戸へ歸り

八十七  
 ましてから御挨拶を致しますと答へて退りました、が跡權之丞が  
 仙臺屋へ話をすると、仙養子を取るならお取ささい何れ歸つた  
 上で御相談を致しませうと云ふのですが、二千兩の一件が有りま  
 すから當分養子でかく客分として其年の十月坂倉や小三郎を花  
 川戸のお留の居る所へ引取りましてお静の仙臺屋の家へ歸つて  
 忘れ無いの池田格太郎、静何うか彼のお方と思つたが病ひの  
 床も着きましたのでお留の、留困つた事なつた……と、思ひ  
 ました、が容易ならん手管の名人大宮權之丞より若い小三郎が宜  
 いと思つたかお玉と云ふ下女、金を握ませ計らずも致して大橋  
 の或料理屋で小三郎を解附け是れから人目も耻ざる様亦有様で  
 御座いますから小三郎と此お留に談判をしたがナカ、改心を  
 する様子が無いので仙臺屋へ来て權之丞が相談及び二度目の  
 親類會議もお留を追ひ出さうと云ふ騒ぎ、小三郎と縁を切ると云



八十八  
ふ此事件から間違を起して立派な御籠御用も一夜の内に灰とさ  
る騒ぎに至りますると云ふ手續きで御籠屋の家の焼けますが此  
お静は是れから己れの思ひ込んだ池田格太郎と夫婦にありま  
か但しの思ひを遂げませんか次席も申上ます

第八席

御籠屋の後家のお留が小三郎を我家へ引き込みまして大宮權之  
丞と云ふ己れの情夫の有るのを構はず小三郎を自分の娘の養子  
とするど云ふの話し金二千兩も持つて来て呉れると云ふ  
ので客分として我家へ置きまして御座いますか何うか此男を一  
つ手に入れたい者だと云ふお留が考へて御座います其所で大宮  
に知れて何うも工合が悪う御座いますから大宮も知れん様よ  
旨くと考へて居ります内に丁度十二月の淺草の觀世音の市是れ

御籠屋騒動

御籠屋騒動

今改めて申すまでもございませぬけれども觀世音の市と云ふ者  
の江戸の名物でございませぬ此位は大した事なございませぬ昔よ  
り致し今に變らん繁昌と雖も古の繁昌は又格別特に徳川十一  
代將軍の御代は繁昌と云ふ者一通りであかつて頃日も恰度夜  
の明方からナラ降り出す雪模様雪をかして品川大森近  
芝麻布白金近邊外の市で買つて繁昌の仕無何でも觀世音の  
市であければと云ふ斯う云ふ工合で有りまして………登壇に恰度  
お留が顔を洗つて其姿もしどけなく留ア………何となく宜い  
氣持だ雪景色と云ふもの………と障子を開けて雪景色を見て居  
りますと養子の小三郎もおさまして木綿縞の衣類も唐綾の羽  
織然とした服装をして白足袋を履いて夫れへ來りましたか  
小阿母さんお早うございませぬ留オヤマア………誰かと思つ  
たら小三郎さんでございませぬか大層お早くお風呂へ這入つたの

御 簾 屋 騒 動

ですか 小「ハイ……雪でございましてから一ト風呂這入つて見  
様と這入りましてが宜うございまして 留「然う……何所かへお  
出…… 小「何所へも参りませんが観音の市でございますから……  
……夫れにお静さんが仙臺屋さんと観音の市へ来るとか仰しや  
つた然うで 留「何うでございますか……お前のお静の事半り言  
つて居るが素りお静だつてお前さんと後々夫婦にあつて活すの  
だから然う思つてお遣んあさるの宜いけれども向ふが夫れ程よ  
思つて居ませんから貴方が思つてお遣んあさるの無駄です  
よ静が不可なければ他から嫁でも取らうと云ふ考へですが……  
今日観音様の市ですから私と後程行きませう……貴方何うで  
す阿母と市見物も行って呉れる事出来ませんか 小「夫れ有り  
難うございます手前も親父の家も居ります内何日も出掛けて  
参りましたがお宅へ上つて参る事が出来まいかと思つて居り

御 簾 屋 騒 動

ましたが夫れで大きな熊手でも買つて 留「大きい熊手……夫  
れの遊女屋とか料理屋なら大きな熊手も入ますが用達になん  
にも大きな熊手も入りますから小いのを一つ二つよ飾りを  
買つて羽子板の上いのを買つて夫れで小三郎お前と私と久淵で  
追ひ羽子でもしてお静も呼んで遊ばうと云ふの何うでござい  
ます 小「冗談斗り子供で有りませぬし彼様な立派な阿母さん  
だの私が羽を突くの可笑でございませぬから…… 留「宜いやね正  
月だものまーく 夫れ宜い……後々行きませう……一寸顔を  
洗ふ水を持つて来てお呉れ……玉と云ふ女中が温度の宜い加減  
の湯を盥盥へ持つて来る夫で顔を洗ひまするうがひをする暫の  
間顔を纏めて居りましたが 留「ア……何だか斯う變な氣持に  
あつて来た……恐ろしく氣持が能く無い様だ……は願ひだよ酒  
を一本玉子酒でもして雪を見るから……玉や 玉へ……畏ま

いりました鮫鱈でも取つて来てお鍋に 玉鮫鍋取つて貰いま  
せう……夫れからお前席にお酢の物を製へてお呉れ 玉夫れじ  
やお酢の物を製へませう是れから酢の物を取つて一杯飲み始  
める彼是れ夕暮頃 留小三郎さん何うしたか……矢張り店に居  
らつしやるかへ……玉や然う言つて被下い 玉長まりました！  
……とお玉の店へ来て 玉若旦那様……小何か用事かへ……  
玉阿母様が 小市へ入らつしやるのかへ……坊の 玉坊ちや  
んもお出あるのですから 小オー……然ですか夫でのお供を  
致しませう斯ふ言ふとお留が奥で 留イー……子供に連れて  
の行きませんよ小三さんと玉と店の者二人斗り連れて行きます  
から……と云ふので有りますから其氣よなつて支度をして絹袖  
の合羽か何か着て高足駄で出掛け様とするお留におさまして  
も……恐ろしく若作り美麗ある所の帯を締め其上へ合羽を着

まして是れも最上等の羅紗其時分羅紗と云ふ者の珍らしい物で  
有りますが此合羽を着て蛇の目の傘高足駄生酔で出る 小阿母  
さん危険い……と言ひながらブラ／＼歩行ひ跡から下女下男  
三人連れ饒舌て馬道通りを参ります間もなく這入矢大臣門左右  
を見れば雪の中飾り立てたる細燈籠の手に桶米磨桶を積み重  
ね向ふ鉢巻で大紋付き職人の聲を限り又 職負けました……  
……と云ふのも勇しき七堂伽藍の其内最も見事な観音の本堂此内  
の値一寸八分の本尊居る事かど飽されるも道理あり十八間四面  
の堂又向ひ扱ても小三郎祈念を爲すが早くお静よ會ひます様お  
留此小三郎と今日までも手入入れて彼の簾屋の身代を一握  
りにしてお静めの遣さけて自分の自由にし度い者と人の自由の  
見なません観音薩埵の眼中に是れ等兩人どもを看破す可き事  
でございませうが夫れも知らざる凡夫の淺間しき事に幾許

御簾屋騒動

か錢を投げ……是れから彼方此方奥山を見て行く内にお留の六  
分酔も醒めて参りましたが飾り松の大きのどなぞや何や彼や  
皆買ひ調へまして 留斯う買つたからは二人とも先へお歸り私  
の跡々跟々玉を連れて行くからと若い者を二人歸して仕舞ふが  
留途中で飲んでお出……馬道の甲子か何にかで幾許か錢を呉  
た錢を貰つて二人 甲却て主あしん僥倖だ……と欣んで行く  
で三人の跡々跟々歩みて参りますお玉の走つて来まして 玉一  
寸とお妻君さん此所等で以て隠れる家の何所かございせんか  
ね 留何所又仕様かね 玉彼の藪の何でございませよ横町の所  
又賣茶庵と云ふのがございませ…… 留人が込む所の嫌だから  
ね 玉賣茶庵なら込み合ひませんよ 留夫れぢや其所を借りて  
お呉れ…… 小三郎さん賣茶庵で休息で行きませうか 小阿母さ  
ん宜しゅうは願ひ申します 留夫れぢやあ玉や一足先へ行つて

御簾屋騒動

…… 玉宜しうございませと先さへ行つて吹き込む其内にお留  
小三郎の参りました 女サ…… 此方へと頼て兩人を……問  
へ通す小三郎の奇怪赤顔をして居ります…… 儲に部屋に四疊半  
斗りの小坐敷お玉の次の間に殿然と扣へて居ります問も無く出  
て来る酒肴同く夫れと云ふ問も無く何所から取つたかお梳盛に  
向附け焼魚又刺身と云ふ 留サ…… 小三さん飲んで…… 小  
何うも是りやわ阿母さん相済みません 留済むも済ま無いも有  
りやわ仕無いよ 小仙臺屋からお静さんが参りますと言います  
が今日の参りませんか…… 留お静……と言つて種々阿母さん  
の思ふ様でも無い餘り酷いじやわ無いか小三郎の驚いて 小何  
よ…… 阿母さん何よと言やませんよ 留私の飲み掛けでも飲  
んでお呉れ赤と顔赤らめ 留此方へお寄んな……とお留が憐れ  
煩惱も迷ひ初めたる心も身も今の男の爲めよしとけ無く酒が旨

御 簾 屋 騒 動

九十六

にせる横懸慕娘の夫を寝取らんとそら恐ろしき言葉の巧み膝へ寄り添ひしげく小三郎の顔打ち詠め盃の酒を半ば飲んで言ふを見て小阿母さんそりやあ何でございますか私の方の養子よあつたのでございませぬ留宜いやね私だつて然んなに老母さんぢやあ無し然んなよ嫌がら無いでもねー小三さん小三これに願に困りますと小三郎が頻々俯いて居る其手を取つて留小三郎さん……と言ふ此時隣り坐敷で何人あるか熱と伺ひまして甲「フーン……恐ろしいのが居るなは同役 乙「然うでござるか……察ひ者がアラくアラく 小阿母さん何か言つて……留掛ふ物かね……此方へお寄りな……甲「此方へお寄りなと……乙「何がお寄り……驚いたな……甲「驚くまい……驚く可らずくと立つて行つたの何人だと思ふと是れおん時の町奉行附きの則ち興力を勤めて居ります吟味役秋山幸八と云ふ人

御 簾 屋 騒 動

九十七

今一人の立花七之助と云ふ兩人何者か風俗を亂す奴と睨んで其儘去つたが此風俗の徳川時代の八釜敷ので有りませ……只今たつて姦通罪と云ふ者がございますけれども只今の法の姦通を爲したと言つて重禁錮先づ二ヶ年迄の参るか参らるので極輕いので六ヶ月九ヶ月位で是れで云い加減に先づ姦通罪と云ふ者所分が男女共附ひて仕舞ふ其代り其事故相関する場合も在りても是れを利用すると云ふので有ります徳川の何う云ふ様だと云ふ

一 密通致し候妻及び男の死罪  
 一 不義致したる時夫を殺され候とも密通も紛れ無き證據有れば捕ひ無し  
 一 又本夫が殺して女が存命で有つて證據有れば妻の死罪も行なれます

御簾屋騒動

九十八

一若し密夫逃げ去つて女房半りの時は是れ亭主の心次第  
 一夫有る女と密通の手引致し候者の勿論追放及よ  
 一不義した者が亭主を殺したる時の引廻しの上様……手傳ひ  
 したる所の情夫の獄門でございます  
 一密婦が夫と創附けたる時……  
 何うなるかと云ふと只今で極重くて謀殺未遂とか云ふので  
 すが創を附ければ獄門でございます  
 一主人の女房と密通した者の引廻しの上獄間女の死罪  
 一養母養娘始に密通をする者の獄門  
 と云ふのですが今小三郎とお留の所爲の表沙汰なれば獄門よ  
 ある所の刑を犯して居りますけれども凡夫の墓さ是非あき者  
 で御座います小三郎お留の夫れからと云ふ者のガラリ……と  
 變つて仕舞ひましたは是れを委しく遣れと仰せの方もございま

御簾屋騒動

九十九

すが今を去る事六十年前あれば遣りますすが今日の社會の彼様あ  
 事の幾らも有るのですから尙更道德の腐敗を救済せんければあ  
 らす亦孝子節婦を出さんければあらんので是れが爲め歌舞  
 伎座の網模様燈籠の菊小枝七之助の演劇も停止といふ事にあつ  
 て僅十日間として閉場及びました夫れから見ますと斯る淫婦  
 が有ると思へば孝道無類のお静がございますは是れ一通りあら  
 ん事でございます……扱て夫れからと云ふ者の小三郎お留の夫  
 婦の様で朝早く小三郎か起きると何時までも寝て居るお留が一  
 所よ起きて留サ……水を汲ませう……顔を洗ふ水を取り  
 ました……と伺さますお茶のお玉に言ひ附ける 留お玉や小三  
 さんの不味物の食べ無いからお刺身……鯛のてり焼何の彼のど  
 申します……小三郎の家のお亭主もあつた様だか變でありませ  
 ん其内に新年が参りますとお静の美麗な服装をして居ります

御簾屋騒動

から 小随分美しい女だ……と小三郎の思つて居ります……仙臺屋善八と同道で年首も来たのですが天然の美形改めて其容貌述ぶるよりも及ばず形容する迄も無いが此様か美人が何うして此世中又出現したかと思ふ斗り左乍ら天人の天下りしは是れもて有らざるかと思ふ夫れも紅粉を粧ひ綾羅を身纏ひて姿の仇やかある一通りやらん事なるに莞爾と笑つて其所へ来られました雨手を突かへ 留阿母様新年お目出度御座います 留オヤ静か能くお出でだお前も彼の不可の病氣の宜いかい 留も……此頃少ども起りません 留仙臺屋さん前々舊年のお世話もありましたが今年も親類の御交際を願ひます 仙賊も持ちまして目出度事でもございます就てはお静か於ても身勝が此頃能くありまして別段此所が悪い様な事もなくつてま……何うも欣ばしい留本當も欣ばしいね…… 仙私しも此んも嬉しい事無いと

御簾屋騒動

思つて居ますが……夫れは然うと時に何んですね……お静も身勝が能くありましたら養子の一條で御座いますがお静が嫌でも私しが何うかと思つて居るのだから…… 留伯父さん未だ身勝が悪う御座いますから……一年位は一人で居つて夫れから又此養子の相談を願ひ度う存じますから…… 他夫れだつて然うの不可無い……何でも宜いまー四五日此家泊るとしてお前私の言ふ事を聞いて…… 留ア……泊つて芝屋でも……と云ふ所へ 小阿母さんへ…… 留何だい……此方が仙臺屋さんだよ 小仙臺屋さん未だお目よの掛りませんで御座います…… 留仙臺屋さん此れが養子もありました小三郎です……仙ナカ……立派な器量人はれ……何うも結構静何うだ斯う云ふ養子が……嫁の無いの養子もお出でもあるの……小三郎顔赤らめて 小イーエ……容分も見習ひの爲め店の御用を致して居り

ますので 仙此人も可愛然うに只斯うやつて置かずよ 留善八  
 さん何にも能くなら無くとも宜う御座いますから配遇せませす様  
 私からお頼み申します 静嫌で御座います……然んな事……  
 立ち上り 静伯父さん一寸とお顔を 仙何だい静や……  
 伯父さんと少うしお土産の事で 留親子の間で然んか事宜い  
 やり無いか仙壺屋善八の立つて来て 仙何だい土産の事つて  
 静伯父さん知ら無いの…… 仙何を…… 静阿母さんと小三郎  
 さんと宜いの中に…… 阿母さんの御養子なので有りませすから飛ん  
 だ事にもあります…… 仙壺屋はおどろきました其口 仙兎も角  
 お静を二晩三晩泊めて呉れ…… 留二晩でも三晩でも泊めます  
 から 仙お頼み申します……と夫れから御馳走が申して下さる  
 ……に酔つて出掛けて仕舞つたが鑿劍者大宮權之丞の所へ  
 遣つて来た 仙大宮さん居ませすか…… 大誰だ…… 仙仙壺屋

第九席

善八です 大此方へ這入れ……ペロ〜に酔つて来て仙壺屋何だ  
 …… 仙手前に於ても實に譯が分らん事が有るから夫れで参り  
 ました彼の養子の小三郎の事で 大養子の小三郎が何うした……  
 ……  
 仙静に承たまはると小三郎は静の養子で無くつてお留の養子だ  
 と云ふ事を静が申しまして嫌だつて言つて居ります 權ハ……  
 然うか夫りやアなア静は然う思ふのも尤もだが今更彼様な事を  
 言ふとお前に愈よ變に思はれるが先代の主人市右衛門と乃公と  
 は兄弟同様の間柄だから斯く言ふ所の權之丞が市右衛門に世話  
 したが一人の悴も生れて有つてア……云ふ善い悴が出来て居る  
 うちに死で仕舞つてお静は目が悪くなつて先年から今年に掛け



御簾屋騒動

てお前と箱根へ湯治に往つて居たが……此間お前の所へ来て居  
た池田侯の池田格太郎とかが彼のお静殿の氣に入つて居るとか  
聞いて居たが池田頼母殿の身内だとか……然う云ふ者を知つて  
居るのハハ……變だと思つて居たのだよ所が夫れが池田善右  
衛門の息子ださうだが 仙夫れの私が存じて居りますのハ種々  
御厄介になつたので…… 權然うかい……坂倉屋の小三郎を養  
子と貰ふと云ふ事の御承知で有らうが自分の家へ引き入れて二  
千兩の金をと云ふから御簾屋も夫れ程もあつたか二千兩取れさ  
げればと言つて居つたが其内も小三郎と不義事をして居ると云  
ふハイヤハヤ言語同断だから拙者が先達ても意見をしたらが以前  
の變も交情で有つて 仙承たまりました貴方も色男で御座い  
ますからさ…… 權も……言つて貰ひ度く無い以前種々な事  
のあつたが今の左様な事無いから……然しお静が居ると云ふ

御簾屋騒動

あれば拙者が参つて小三郎とお留の前で以て其様事せん様  
に充分意見をして遣るから必ず心配をせんが宜い 仙何うか宜  
しく…… 權ア……心配のせんでも宜い……一杯飲んで行かん  
か…… 仙今充分飲んで来たのですから入りませんと戻りまし  
たが大宮權之丞のムラ……として家を急いで御簾屋へ乗り  
込んで来ると頻にお留が頭と相成りまして家内中集つて歌がる  
た夫れも済んで仕舞つた所へ鼠の紋附茶宇の袴黒の羽織お留が  
一番先へ見て 留オヤ……何誰かと存じましたら大宮先生能く  
お出です 權餘り宜い事でも来無いが……今日は何かお静が見  
ぬたそりで 留静が参りました……一寸と御挨拶 靜大宮様何  
日ながらは機織宜うございます 權何うも……誠と何うもア……  
……結構なき隠しくなつた……小三郎のお前の養子とあつて居  
るのだが全く養子とする氣か…… 靜私の身勝手仙台屋さんと

御簾屋騒動

阿母さんよ委して有ますから自分の望みを申しますとか私が鬼  
や斯う申す者では御座いません 留貴方何を仰しやるので御座  
います 權イヤ……何も言はん……小三郎何うだ此お静の養  
子になるかと言はれて小三郎は無事に盃を取り合つて此お静と  
今日にも婚禮を仕たい者と思つたけれどもお留の前へ言ひ兼ねて  
居りましたが 小阿母さんさへ御承知になればお静さんと夫婦  
になりたいたので御座いますか御承知にならなければ…… 權オ  
イ……小三郎お前は實の阿母ぢやあ無からう此お静の養子にな  
つたのだらうして見ればお留さんが愚圖く云ふ譯は無からう  
お前はお静さんに嫁はせる積りで持参金を持つて来たのだらう  
……今迄何んか縁が有るか知らんが小三郎殿断然つり切れ……  
留大宮さんまたしても小三郎さんと悪い事でも有ると思つて  
ですか 權悪い事無いも有るも無い者だ此大宮權之丞其位の事

御簾屋騒動

知て居無いか馬鹿白痴めが言葉を殺すよ及ばん今嫌と云へば  
慮無く訴へるが小三郎もお留も途ひも繩目の苦痛の勿論の事  
門もあるだらう 小大宮さん……今迄の不心得の改めませし  
來り断然り縁を切ります次第も依らば今日から御簾屋を出奔  
しまするのでございませう 權宜しく……と言ふて立ち戻つて  
仕舞ふお留の其儘直ぐ自分の部屋へ歸りました 留何うしたら  
宜からうか……と暫く思案をして居りましたが 留も……斯  
うありやあ仕方が無いエー……何うするものじやあ無い俗も言  
ふ毒を食ばい皿まで搦ふものか寧の事彼の小三郎を殺すよりお  
静を殺して仕舞へ……と恐しい考へを起して臺所より出及庵丁  
を取り正月の然も十三日の北風凄く吹き出して物恐しき花川戸  
屋根さへ今に刺れんかと吹き荒む風より凄きお留が煩惱……以  
前の己が戀男今の仇ある權之丞に辱かしめられ無念の涙頼み甲

御 簾 屋 騒 動

斐無き小三郎の言葉是れが別れになる事あれば悪や仇たるお静  
をたゞ一突きにと忍び忍べる二階の階子障子を静と明けて中よ  
道入れれば斯の如何娘のお静枕に着いて裏絹かき掻巻を襟迄掛  
てスヤ〜と寝入りて居れどナカ〜と折々……チヨイ〜と  
目が醒めます 静何んだか今夜の寝られ無い……と獨り言を言  
ひながららト〜と……とすると目が醒めます此時誰やら来た様  
子あれば 静誰ッ……と聲を掛る流石のお留も 留ア〜ッ……  
と思つてト〜と……と階子の下へ下りて仕舞つたが又も  
や上つて来ると今度の行燈の燈火暗く能く寝て居る様子です  
ら徐と障子を明けると打俯に寐て居りますから 留已れ能くも  
……と今や突うとする時ト〜と〜と又足音がするから愕然  
して夜着の後へ隠れると養子の小三郎か顔を出して 小お静よ  
んお寝みですか……下で △若旦那……と呼ぶやうですから小

御 簾 屋 騒 動

三郎ト〜と……と階子を下りて来るお留の 留此所で宿す  
るかエー……悪いと咽喉の邊りを横から突くとキヤア……  
と騒ぎまするのを持つて引きずり起し又もや咽喉をブツリ  
……とむくるとお静よあらずして下女のお玉 留ヤ〜……お玉  
を是りやお殺したのいとト〜と〜と階子を下りて小三郎の部  
屋へ行くど燈がカン〜として何やら私々密話をして居ります  
から 留是りやお確よお静よ相違無い己れ翠斯うして呉る……  
と世の中よの恐しい昼見も有る物でお静と思つて下女のお玉を  
殺したので逆上がつて我子の市太郎が寐て居る事よも構はず懸  
の爲め迷ひよ迷つたる此女小三郎とお静を焼き殺さうと火を  
附けたが始の内いさのみよ有らざりしが忽ち燃へ出して天  
井より屋根へも燃ゆる此時悲鳴の聲のヒ〜……と聞かしが鳴り  
出す半鐘のガン〜〜其内よ無残や飽まで金を掛て築きたる

家も土蔵も皆一時も灰とまじりました夫れを見てお留にして遣つたりと歎んで大宮権之丞方へ乗り込む始めて気が附く俸の市太郎憐れ小三郎お静の一間で焼き殺されたるか殺され無いかと云ふのの次席と致します

第十席

人間の心と云ふ者の實に斗り知れん者でございます色慾の爲に我身軀も忘れると云ふ……成程夫れに違ひ有りません況して婦女子あまの格氣の爲めに身と忘れて容易あらざる所の計略を致す者がございますから能く騷動が起ります此女あまを騙すの仔細無い女位騙しても害の有る者かと仰しやいます方も有りますすがナカ一騙される者で有りません若し騙された女が有れば全く恐ろしい性根の此御簾屋騷動のお留の様で有たらば夫

れこそ容易あらん騷動が起るのでございますから能くは是れを謹しまさければおまじりませぬ己れが娘の養子にした小三郎を我者に仕様と云ふ根が恐ろしいのに又小三郎が夫れは應じて言葉に従ふと云ふなど人倫の道を破りましたる随分甚だしい人面獸心と云ふ方な性質なのです然しおまじりませぬはんの其身を忘れたので人若き時の血氣未だ定らずと云ふので有りますから去りとての款しい次第で彼様お所の迷を人間の時したいが兎角は晴やらんと云ふのの浮世の常で仕方の無い者で御座います夫れのかんだと云ふと情慾の疑ひたもので御座います……どうしても人が忘れられ無いと云ふ者の食慾情慾……善きを望むと云ふ木の綿の衣類が出来れば縮緬の羽織が欲く縮緬が出来れば錦の帯が欲くあると云ふ何うも仕方がない者で御座います去れば近頃の有様を見ると昔の一汁一菜と申しましたのが一寸致しませぬ

御簾屋騒動

西洋料理とか申して七色八色出ると云ふ………けれども昔と違つて此頃の小食で唐煎を七ツ食つた………河豚を十二食つたと云ふ酒を五升飲んだ………飯米を一升二合食つたと云ふ豪いのが御坐います當時一杯飯を食ひ過ぎて胃病もあつたとお醫者も掛つたり酒を飲み過ぎて腦充血を起したあぞと云ふ誠に此頃の柔弱でございます夫れ丈に生活の程度が上つて來たのでございますが昔時どの余程遠ひます亞米利加での牛の乳の湯に這入つて白き皮膚を保つとか香水を沸して此中へ這入ると云ふがナカ………ユライ香ひを致させるでございませう少し變つたのの葡萄酒を沸して此葡萄酒を呑みながら酔つて仕舞ふブランデーを沸して中へ飛び込んでブランデー往生をするると云ふ随分變つたのが幾等もございます是等の何かと云へば世間の人より變つた慈の爲ですが殿の紉王の酒池肉林の遊びをさし其國を亡しましたのが

御簾屋騒動

騒動の程度が進みますと其身を果しますお留の充分ある所の活計歡樂をして居ながら他さ足らず小三郎を我者として偶まお静が泊る其夜に小三郎が己が妻と思ひし迷ひ覺めやらず忍び入つたのを無念と思つて留我子も斯うあれば戀の怨みいつを燒き殺して仕舞ふ………と前回述べましたる如く忽ち我家又火を放ちましたが何條地る可き炎々として焚ぬ上る内に留早く小三郎が死で呉ればお静も死ねば………と自分の服装もしどろな服装をして居る………烟の四方に上る番頭若衆小僧の皆立ち騒ぎ何うして宜いかと思つた二階に居たお静小三郎烟が劇しうございますから餘火事で御座います小三郎様………と言ひれて階子から下へバタ／＼降りて來るとすばらしい烟でございます聲阿母様………と云ふ内々愕然して庭の雨戸を開けて見ると斯の如何に我家の一面の焰に包まれて居りますから聲何うしたら

御簾屋騒動

宜からう……阿母様……誰か来て呉れ……と云ふ内に飛んで参  
つたのの店の者の内で心利きたる峯吉と云ふ小僧 峯サ一嬢は  
ん此方のお危険御座いますから早くお出ささい……と事正  
十三日霜降る夕風の劇しうございます 静オー……危険峰とん  
お前何うおしだ……と云ふのを 峯何でも貴方私の手へ掴ま  
てお出ささい……と隣の家根へ上る 甲危い……怪我する  
とあらないぞお嬢さんを助けて遣れ……と云ふと一人がお静の  
手を取つて 甲乃公が受合つた……と櫓子をトノノ……と下  
へ降りて来て 甲お嬢さんの早く行先迄送り申さなければ……  
…… 峯宜うございます私を知て居りますから行先へ送り申すと  
しませう……お嬢さんお出ささいまし 甲何でも宜いから氣を  
注げて…… 峯宜うございます…… 静私何うなるとも宜い  
けれども阿母さん何うしたらう……市太郎の阿母さんと一緒

御簾屋騒動

に行つたかしら…… 峯今貴嬢然んな事仰しやつても仕様が有  
りませんから参りませう 甲駕籠が来ましたから此駕籠へ乗  
て入らつしやい是れから明神下の仙臺屋へ参りましてトノノ  
……戸を叩きますが……仙臺屋で合點がゆかんと事と小手を  
して見て居ります △何でも花川戸の方です 夫りやあ大變  
……と今内中飛び出した跡でございます戸を叩く人が有りま  
すから仙臺屋の女房が出て来まして 女誰殿…… 峯お嬢さん  
です…… 女お静さんかい……と戸を明ける 女何うしたのだい  
お静さん 静火事が出ました…… 女今伯父さんの花川戸の方  
角だと云ふのでお前を心配して行つたのだよ 静然うでござい  
ますか…… 女お静さん何う云ふ工合だい…… 静何う云ふ工  
合も何にも有りません話申せ只愕然致す事斗りでございま  
す 女何が愕然するのだへ…… 静外でも有りませんけれども

御簾屋騷動

今夜寝て居りますと若旦那が忍んで来まして……女、忍んで何  
 うかしたかへ。静、何だか知りませんが詰まら無い事を仰しやる  
 んです。私、種々申したので御座います……女、夫れから何  
 うしたへ。屋、夫れから何んです……別に何うも仕合せんけれど  
 も阿母さんが大分怒つてお出さつた様でございますから若旦那  
 が私の所へ遣入て入らしやると思ふとお玉が何か騒ぎました  
 が若旦那も一緒に居ると畑が来ます。然う申しますと下へ行  
 つたのです……女、夫れから何うしたい……静、若旦那が来て  
 助けて呉れましたので御座います。夢の様で御座います。女、若旦那  
 那と云ひ小三郎さんだらうが彼の人か酔い事をする事無いね  
 ……静、若旦那は静さんと夫婦になり度いのです。娘の聲、乃公の  
 聲、だど小三郎さんを亭主として仕舞ふ……丸で亭主なので御座

御簾屋騷動

いますから怒るでせう……女、呆されて仕舞ふね……私、少の  
 とも知ら無かつたよ……静、夫れ、爲うと市坊の何うしたらう  
 峰、坊ちゃん何うしましたか彼んさま……何うも騒ぎです  
 から。女、坂倉屋の阿父さんの怒つて居らつしやるだらうね……  
 ……静、何んだか持参金をして詰ら無いと言つて入らつしやる  
 ので有ります。然かし妻君の氣に入つたので若旦那も弱つて居る  
 のです。お嬢さんと御婚儀をしたいのですが。女、何んば何でも  
 娘の所へ養子よ来た若を阿母さんと夫婦もあると云ふの、何ん  
 と云ふのだ。何んと云ふ事で御座います。夫れ、然うと火事  
 の何うあつたの……静、峰吉行つて見てお出さ……女、今に歸  
 つて来るだらう少しお待ちな……静、私心配で成りませんか  
 ら。峰、行つて見て参ります。峰、公の取つて返して花川戸へ参りま  
 す。悉皆と淺岡の家、焼けて跡方も無く此方のお留の聲も振る

百十八  
 亂し權之丞の宅へ飛込んで來ました權之丞の二階で火を見て居りました。が怪しき火事装束をして今出様とする時お留が参りましたから、權其所へ來たのにお留さんか……何だい、留火事で驚いて仕舞つた……權ウーン……權恐ろしい火事だつたな……家の半焼して仕舞つたあ、留然んな落着いて……何うかして被下いな、權別に何うかする事も出來ないが今人を遣つて働かせて有るのだがお静さん泊つて居るか何うしたか、女小三郎と二階でもちや／＼して居るが狂つて夫れで火事を出したのだらうと思つて居るので、權何の何うした……彼の梓の市太郎の留坊の……市坊の忘れて仕舞つた、權ッ……市太郎の忘れたか兎に角一絡に行くが宜い……お留何だか貴様の悪黨にあつたのふ……此大宮が淺岡の家を乗取り策で貴様を彼所の家、首屋能く妻を遣つた上、句乃公の種を宿して生だのが今の市太郎

百十九  
 彼を確よ相續人にして市右衛門を二人で毒殺したも交際のはし遂ひよ露顯の種とあつて悲しい事に此乃公も充分な口を入れる事出來ない様よあつて仕舞つたが其内に市右衛門の死んで彼のお静がナカ／＼の若で二人の中を知つて居た故断然切つた様にしたのも世間への義理辰巳屋と仙臺屋が中へ這入つて何うやら話の纏まつたけれど纏まらんのか貴様の身躰然も坂倉屋の小三郎を養子に貰つたのの宜い……滅法宜い話なのだ、彼を養子よ貰つた甲斐もあくお静の養子で無く貴様の養子で有つたが權之丞の格氣の焰夫れを我慢して居るよ汝の今夜市太郎を忘れお静よ小三郎を取られたのを無念と思ひ扱ひ我家へ火を附けて殺さうとしたな……顔色を變てお留の、留權之丞さん火を附けたのも戀の爲めだが彼ア云ふことよなつたのだから仕方が無いから歸めるが元の通り可愛がつてお呉れお前の爲めに苦勞するから



何うぞ女房と思つてお呉れよ……元々通り女房と思つてお呉れよ  
 權之丞さん元木も増る裏木なしも……仕様が無い捨てられ  
 たのだから大宮さん……悪いとか可愛とか言つた中じやア無  
 か子までおしたる中よ……可愛がつてお呉れよ……と側へ探  
 り寄つた權之丞のせしら笑つて 權誰か来た様だと見るよ二階  
 の階子の所へ顔を半分焼け爛れしてお松が 松お妻君が此方よ居  
 らつしやりませんか 權誰だ…… 松ハイ…… 大變で御座いま  
 す坊ちやあんが焼け爛れ死でお仕舞ひささいました市太郎の邊  
 岡の仲にあつて居るが全く此大宮の種無残の最後を遂げまし  
 た 權ウーン……是りやあ無情い事だ……是れお留…… 留と  
 んでも無い事になつて仕舞ひました 權市坊の貴様の側に寝て  
 居たのでい無いか 留寝て居たので有ります……寝て居たの  
 も忘れて仕舞つたのです此の一言を聞くや大宮權之丞はハッ

と怒つて 權此女め……不實な奴……と突然襟髪をグーツ  
 と掴んで引き寄せました 留お前何をするのだへ…… 權何を  
 するとい能く出来た……汝の様な奴の世の中の害だ……「ヒッ」  
 ……と擲りました 留サー擲れ……とお留の食つてかくりまし  
 た 留淺岡の家の乗取り策も貴様が教へやがつたのだ……ヤ  
 權之丞手前の佐竹の大悪黨ぢやあ無いか…… 權是れ大きな聲  
 を出し居るかと突然手を取つて引寄せ様咽喉をグーツ……と締  
 附ける 留ウーン……何を……と締附けられながら苦しき呼吸  
 を吐いて何も言ひやとすから又も強く一締め締め付けてお  
 留何じやう堪る可き夫れあり舌を噛み目を吊し上げてしまひ  
 ました 權権婦……己れの終りの此様お者だお松の慄へて 松  
 大宮さん貴方の何うしました 權お松貴様も言ひ付けて置くが  
 淺岡の家は潰れてしまふし市太郎も此通りよあつたから只氣の

毒さのにお静斗りだ彼の小三郎の坂倉屋へ離縁をして仕舞へば  
濟むのだが……仙臺屋と辰巳屋へ乃公が手紙書て遣るから是れ  
を持つて行くが宜い 松長まりましたしてございます……

第十一席

權貴様の怪我した所早く療治をして貰へ……火付の本人の  
此お留だが生返ると不可から生返らんうちに……斯う云ふ惡婆  
を生して置くとは後日の害もあるから呼吸の根を止めて仕舞ふが  
……と筆を取つて悠々と認めました 權此手紙をお静にも見せ  
て能く相談をして淺岡の家を立つて呉れ氣の毒さのにお静婦一  
人の爲めに彼様お事になつたが……お松早く行け 松ハ……  
とお松の行きました未だ死にきれん所のお留を是れでいなら  
しと細帯取つて咽喉へ締め付け 權ウー……と一締め締めて

夫れなりけり 權斯う云ふ女の見せ示めの爲め大川へ水葬式に  
して呉れんと裏手の大川へ打ち流してしまひましたか市太郎を  
葬つて居る暇が無いのです大宮權之丞も江戸よん足を止められ  
無いから何れへか身を隠さんければならぬと思案をして居る所  
へ門弟田原賢三が参りました 田先生…… 權何だ田原賢三……  
…… 田荒い事をささいましたか…… 權然し彼云ふ女の早く  
殺して仕舞はんければ不可なのだから殺したが……此子供が氣  
に掛るのだ 田子供衆の私しが是れから用意しまして新堀端の  
善福寺へ葬ります貴方此道場を捨て何れも出になりませ  
權乃公の江戸に居られんから甲州へでも身を隠さうと思ふ江  
戸の道場の所を頼むぞ金子此所又七八十兩有るが淺岡から皆  
取つたのだから何れ免れん大宮權之丞だから跡の貫様萬事頼む  
ぞ 田ハ……畏まりました…… 權跡の始末の一書を認める

御 簾 屋 騷 動

百二十四  
が是りやア淺岡一家頼末町奉行に頼むの外に無いから貴様宜  
しう遣つてお呉れ 田、ユ、ー、…… 宜しいから心配さらん方が  
宜うございます合點でございます…… 權兎に角是れを背負つ  
て行け…… 田、宜うございます…… と願て彼の子供の死骸を背  
負て此所をば下りまして善福寺へ此死骸を葬と云ふ事又相成つ  
たのです大宮權之丞の書付を遣して金を持つて逃げました翌日  
田原賢三の北の御奉行所ある村松信濃守へ計らずも訴へ出まし  
た故お調べとありましたが小三郎の雇人も同様の身で有ります  
し市太郎とお留の行方所かお留を權之丞が殺した事誰も知る  
者無かつたので有りますから分りませせん仙臺屋辰巳屋の呼び  
出しましてお調べにありましたが是れどした證據も上りませせん  
から頭兩人を呼び寄せてお調べの後娘お静の家督を許されまし  
たが花川戸の屋簾屋の家も今空地よあつてしまつたのですか

御 簾 屋 騷 動

百二十五  
ら何もしして宜いか分が分らんのですから 誰伯父さん私の住む  
所を……と言ふと仙臺屋の主人が 仙お前が生中よ彼ん所へ  
氣張つて家を持つて居ると却つて能く無いから根岸へ家の小い  
けれども以前旗元の隠居の居た所が有るから其所をば明けて呉  
れるから其所へ彼のお松と峰吉と夫れ丈をおいて樂々遊んで活  
したら宜からうま…… 其内に池田格太郎様でも若しお前と夫  
婦にある様事もあらうから…… 靜然うで御座いますか何分  
宜しく……と言つたが一日片時も思はん日の御座いませんから  
何うか池田様のお屋敷へ行く事も出来無いが早く然うされば宜  
いがと待つて居りましたが坐敷の十疊八疊六疊と四疊半と四間  
丈でございますから仙臺屋辰巳屋が来る時の居間で騒ぎ廻つて  
お茶の師匠歌の師匠を呼んで稽古をするやら月琴あぞを以て遊  
んで居りましたが歌を能くする高賀さんと云ふお方が折り

御簾屋騒動

遊びも参りまして歌やお茶を教へて居りますが高賀と言へるの  
年四十計りでございませうが兩手を支へて高私の今日お茶の立  
て前を致しませう、静服紗捌きの未だ出来ませんからお師匠さ  
ん何分宜しうお教への程を願ひます、高然うしてお茶柄杓の使  
ひ方もございませうから是れからお茶の立て前から何から少しお  
教へ申しませうが是れから少し歌をお教へ申しませう、静有難  
う存じます……高失禮ながらお茶の方の千家で入つしやいま  
すが私少し千家を學びましたけれども覺て居ります丈お教  
へ申しませう……歌の方あれば推しも推されも致しませんから  
……静彼のお師匠さんに伺ひますが三木三鳥と云ふ事を申し  
ますが三木のお話の此間伺ひましたが三鳥と云ふの何の事で  
ございませう……此間仙臺屋の伯父が来てお前の三木の話をし  
て呉れたが三鳥といふ者の分らんが何だらうと仰しやいましたな

御簾屋騒動

が存じませんから知らんと申したら乃公の三鳥と云ふから鶺鴒鳥  
よ家鴨に鴨だらうと云ひましたが然んか者でございませうか  
高ホ……ま一何で然んか者が歌に讀ませうかね……是  
れにの色々大變六ヶ敷話しが有るのでございませうが貴方だから  
お話し申しませう三鳥と云ふの百千鳥呼子鳥稻負鳥と申すの  
でございませうが彼う云ふ歌がございませう

百千鳥さへする春は物ごと

改たまれども我ぞふけ行く

おちこちのたつきも知らぬ山中に

おぼつか無くも呼子鳥かき

ヒ……と鳴く鳥でございませう

我門に稻負鳥の鳴くなへに

今朝吹く風に鷹の來にけり

御簾屋騒動

是れが三鳥の歌で御座いますか人にお話し被下ますか 静「ハイ  
……然うで御座いますかお六ヶ敷事で御座いますと云ふ二人が  
話の半に最と風流たる二人が何や知らねども書つ書れつ推つ推  
れつ爲す折からに表の方へ吹すさんだる尺八の聲吹つる曲の鶴  
の巢籠り 静「表ての尺八の様でございませぬ 高「然うでござ  
いますか 静「何れの何誰か知れませんけれども何か心有つて来  
られたるか面白い鶴の巢籠り…… 高「彼の巢籠りの大層六ヶ敷三  
木三鳥の理由の様には餘程吹さずさみの一通りあらん者でござい  
ますか何所の御方か…… 静「ホン……又何所のお方でございま  
せうお松や此鳥目を…… 松「ハイ……畏りましたとお松の門口  
へ来て姿を見れば鼠の木綿の衣類も鼠の丸くけ笠を被ふりて尺  
八を吹き草鞋履きよて錦の袋へ一本入れたる一刀腰も帯つし油  
断の無さの深き望みの有る様子何れの誰か何れの人か夫れど知

御簾屋騒動

らねと虚無僧はお松の思はず笠の内覗いて愕然 松「ヤ……  
貴方様の何日ぞや湯治の其節にお目に掛つた池田侯の格太郎様  
で入らせられませんか 格「其許の何れの御方ですか…… 松  
「ア……私の仙臺屋の主人と参りました御簾屋の下女のお松と  
申す者で御座います 格「シヤ……嬢様のお静殿の…… 松「ハイ  
是れが住居で御座います 格「左れば此所が只今の隠家で御座い  
ますか 松「今の御簾屋の跡を立てる事も出来ず餘儀なく是れも  
居られますがお嬢様の世にも人にも捨てられてと斯うおつしや  
つては御座いますと…… 貴方此方へ御出にあつて…… 無理  
に奥へ引上げて 松「嬢様池田の若殿様が…… 静「何と仰しやる  
池田の格太郎様が……と駆け出て来て見ると笠取上たる格太郎  
格「イヤ……お静どの 静「マアどうぞ此方へ…… 坐敷へ通し  
ましたが高賀と顔を見合して 格「オヤ…… 高「マ…… 貴方様

御 簾 屋 騒 動

「……と互ひに驚く格太郎と高賀 高貴方、池田の覺太郎様……  
格貴方、歌の師匠の高賀様ですか…… 高マア……何う  
して是れへ……お静殿、此方の私が備前岡山に居ります時、御厄介  
に能くまつたので御座います。静夫れで、お師匠さん、貴方も……  
……高如何も備前家へ永く仕へた者で御座いまするが、まあ、  
不思議の御縁で……格太郎様、貴方何うして御浪人を、格是れ  
に、種々仔細有りますすが、マア夫れ……と言つて居る所へお松  
が頼て茶を入れて持つて来る内に、菓子器の上には羊羹カステイ  
ヲを弄し出しましたがお静、静マア……お待ち遊ばせお茶の  
手前を……と思ふ心の胸一杯、夫れと口に言ひねどもお静の切  
きさ顔赤らめて居りまするの、仙臺屋が話に善き聲料と言ひし事  
も有ればお茶を立てる其間も思つて居りました。格扱てもお静  
どの其後の久瀧お目も掛りませんが、御養子のお話しのどうあり

御 簾 屋 騒 動

ました。静、色々しました……ねーお松……高賀様、夫れよりの貴  
方の御身の上が早速承りとう御座います…… 格、斯く姿を瘦  
して浪人をして歩きますの、父の無念を拂さう爲めに…… 静  
夫れで、貴方のお父様を…… 格、父を討れしのみならず、大切な  
御寶物を奪われしが、其父を殺せし曲者の、今眼前に在りながら器  
物の知れざるまゝに討つ事も叶へん始末で御座います。が、ま……  
……お察し、ささつて被下まし。高、阿父上を討れて、又大切な器物  
をお取られ、ささいましたと、お氣の毒な事…… 静、ま……  
其概略を聞いて被下いまし……又御力にある事も御座います。う  
から…… 高、聞いて被下りませ……二人に責められて、格、此  
事、他人へ話す事、出来ませんが、貴方方お二人、一通り斯る身  
にありたるお話を申すでございませう……と是れから格木が身  
の上話を致しまするがお静が、途いに格太郎を我家へ圖ふと云ふ

……小三郎が忍で来ると云ふ所から池田家へ歸参よあると云ふ  
お静が此格太郎の女房よあるか又縁が間違つて小三郎の女房よ  
あるかと云ふ此所等の所の次席に申上ます

第十二席

前席又述べました根岸の傍よ於きまして池田格太郎が虚無僧  
姿とあつて斗らすも御簾屋の娘お静並び高賀と云へる切髪  
お師匠様とお互に驚ひて高如何して掛るお姿よあらました  
か……と其一伍一什を問ひました時流石よ面目無く格太郎  
も暫くの物言はず居りましたが格太郎の格我浪々あす趣向  
をはお話し申すも耻かしき次第で御座るが實に我父と申す何  
を隠さん池田家の重役池田出羽殿より出たる家柄でございます  
が祖先の利隆公の御縁家よて御存じも有るまいけれども御一門

と云ふ位者遠く池田家の祖先を尋ねれば池田三左衛門輝政の  
嫡男利隆其他に忠継忠雄輝澄政綱輝興政虎利政と云ふ者  
も御座います其中の長男利隆が嫡男が即ち新太郎光政で御座る  
が光政公の重役を致したるの我祖先池田出羽三代將軍家光公  
に御代無く仕へ光政の君も又池田出羽も忠義無類の人と云われ  
我父の代に至るまで別家致せしなれども同一門去ればこそ我池  
田の姓を名乗る然るに當時内膳頭の君のお心只あらず天晴學問  
優れたる御方にて已に松平越中守定信の君を苦しめられ又其他  
の人々苦しめたる事數時に候ふ是れに依つて我等殿に御談言申  
す事數時又夫れ斗りか殿に於て先頃の月見の時婦人をば側に  
置き玉以頻よ野卑お所の歌をば好ませられ毎日お戯れのみを爲  
し玉ふが故に奸佞邪智なる所の喜美須藤三郎其他山崎太右衛門  
津田左源太と云ふ者を集め舞ひつ唱ひつさし玉ふが故に我

等是れを見て嘆息に絶す如何はせんと思へども爲す事も出来ず  
無念の涙のみありしが、宴又侍れば舞へよ唱へよとの意あり  
と我等何で其様お思ひしき事をなし得可きや暫し黙して居り  
たる時方々より琴を取り出して弾き始めたる一人の女子あり  
りき是れおん池田右七郎と申ける我家と同じき一門其者の娘の  
か、と云ふが、弾く琴の音色の最も懐しく唱ふ唱歌の誰れが作りし

立田山紅葉を分て行く月の錦も包む鏡も磨すましつゝ又  
隠し又出しての姿をば寫せの寫せ増鏡……  
と唱て居る時怪むべし殿の忽ちほ氣色變り彼の露ある者を退け  
よ露の背後に怪物ありと恐るゝ間もあらせず露の忽ち懐中より  
短刀を抜くよと見ゆつるが何思ひけん津田左源太に斷つて掛り  
しが其場を去らず津田左源太ヤオヲ身を交して逃げんとするを

追ひつゝ其場よて無残やな憐れにも果無く打ち倒れたりしが是  
れが爲めに露も其場を去らず切り捨てられて敢無き最後此時池  
田出羽に疑りを蒙り某も獄家も暫く這入りしおれども如何せし  
が其後に遂ひに疑ひも晴れ某の浪々致す身どのありたりしが何  
地何れへ成りとも身を暫らく奇せ當分の問戻る可らずと語る人  
も有るが故に餘儀無く國を出て再び心を定めて江戸又出しある  
が……死す可き時死さざれば死に増る耻あれども今死す可  
き時に有らずと思へばこそ今日又浪人を致すので有るが只不憫  
なは彼の露定めて未だに冥途にて屍は死すとも靈魂は死さず定  
めて殿を怨み居るか一家一門の我々をも怨み居らん……何故悪  
人を討つて死なざるかと思ひつらん扱も思ふが儘にはならざる  
者よア……我ながら果敢なき事よ……と歎息をすれば高流  
石は天下の英雄とも思はれし池田格太郎様一伍一什を伺います



御簾屋騒動

ればお厭しき事で御坐います矢張り池田の御家にも悪人原の者が御坐いますか…… 静其様な事御坐いますなれば何とか貴方のお力とも参りますまいかね…… 高賀様 高然うで御坐いますよ御世話を致しませう 静何うぞ緩々此家にお出を願ひまする…… 永く此家に入らしつて何れへ成りともお出なさるも宜しう御坐いますから…… ねー…… 高賀さん…… 高左様で御坐います…… 静然うして仙台屋にも辰巳屋にも此事を申し聞けませう 貴方は御歸参に成る様な時節をお待ち遊ばせ只忠義く…… 云ふて人を無方に殺せば其身が殺されてお家へ忠も立たん事で御座います 貴方の忠義は天道様が宜く御覽で御座います 故必ずお急ぎ遊ばすな…… と二人の女子が慰めて呉れるので今は根岸へと忍び居る身と言ひながら未だ江戸へ来て幾日もあらず何所へ身体を寄せんぞと思ふ折柄親切な言葉に 格左様なればお言葉

御簾屋騒動

に従ひますが何とて我も強ち荒き事を望まんや…… 何うぞ辰巳屋に仙臺屋をば呼んで頂きたい…… と云ふので手紙を遣りますと驚いて来ましたが話を聞いて 辰話を聞けば勇しきイヤ…… 何うも流石は池田格太郎様…… 私も貴方は何うなさつたかと思つて半り居りましたがお國の爲めマア…… 宜しうございます 阿父様阿母様の無くとも池田出羽様もお出でと承り池田伊賀様も御親族何日か立派な御身の上もお成りでございます…… 静の家にも年若の方二人置きまするも甚だ如何でございますか 貴方も天下の學者とか自ら仰る方静も左様な者での御座いません故御心置き無くお出下さい 格池田格太郎六十日置いて頂きたい其後に手前にも見込が有るから 辰六十日でも七十日でも貴方のお心委せよお出被下いますし…… 静の事もお話申せば長い事でございませうが何うして宜いか分らん躰でございませう御存じでも

御座いませうが阿母の悪人でございましてとう／＼大宮様之丞の爲め殺されましたと云ふ事まで分つて居ります。格何うも夫れは……不憫の至りでござつたな……辰不憫な事も何りませう……一番悪いの御簾屋の主人でありましたが然う言つた所が追附かない自分死んで子供が艱難辛苦をする様な始末でございます。格夫れは氣の毒千萬ぢやな……辰貴方様もお静も若い者斗りでの氣まゝも悪うございませうから……高賀様貴方當分如何でございます左様願ひますれば私も安心いたします事です。高夫れは……宅の娘に萬事頼でおきますから宜しうございます。辰何うぞ願ひ申します……失禮ながら貴方様へお小遣ひとして五兩金を差出しますから。高お禮もぞい何うでも……辰何うか夫れのお出を願ひたうございます。高

宜しうございますとも五兩金が三兩金でもお静様と格太郎様の事あれば伺ひますと言ひますから嬉し欣びまして。静何んか人が来ても恐い事有り仕無い池田様がお出にあればと大欣びも欣んで暫くの間の此所は睦く太平の夢を見て何の仔細も無く朝起きれば高賀が歌のお師匠さん丈に歌の題を出して。高是れを貴方……格太郎様如何でございます。格詩の方の手前遣つて居りますれども歌の方の少つと不得手でござる……何うも迷惑千萬お静に於いても面白く春の題と夏の題と秋の題と四季亂題を取り出してお互ひに相撲でございませぬが闘せまするのでござります所がお静の方の元よりしまして何も歌と云ふ程より出来ませぬが高賀の宜い加減にあしらつて居りまする方々の何おふ學者でございます故讀む歌も六か敷唐の故事おを遣ひますか

御 簾 屋 騒 動

百四十  
らお師匠さんも閉口して居りますが随分面白い事でございます  
けれども何日まで遊んで居る身勝でございませぬ故池田格太郎  
或時の商人の姿或時の普化僧の姿をあして歩きます静に於ても  
心安く思つて居る此方のお話變つて坂倉屋の小三郎でございます  
す敢無く御簾屋の焼けて仕舞ひ静に身の食つて仕舞つて  
心に頼む大宮權之丞の行方知れず無残ども何ども言様のござ  
いませぬ三千兩の金の何所へか無くあつてしまつてお留の殺さ  
れて情無くも川へ投げ込まれてしまひました故是非無き事との  
思ふ者の胸にお静の事のみ忘れぬ暇に御座いませぬ毎日根岸  
の御行の松の邊りへ来てお静の様子を伺うが思ふ様に不可成  
時お静の家を思はず覗いて見ますと 格お静さん……と聲を掛  
たの確に格太郎でございます 静ハイ……何でございませぬ  
格貴方とお茶を立てて頂ては馳走も取りませうと思つて 静

御 簾 屋 騒 動

夫れに畏まりましたお安い事で御座いますが私に思ふ様に参り  
ませぬ…… 格夫れに構ひませぬ貴方のお立てまいを頂きたう  
御座います……夫れから貴方に題を出しますから歌を一つ讀ん  
で…… 静御免遊ばせ何うも私の歌の方の不得手でございませ  
三味線を取りますなれの随分貴方様のお氣も入りませぬが歌を讀  
むの何うも 格是れに……三味線の淫聲でございませぬか  
ら餘り欣ばしく…… 静夫れでも三味線琴なれば随分氣に入る  
事をして歌などで學問を仕ない私でございませぬから何うも……  
格學問も何れも入りませぬから…… 静でも……何うも  
…… 格四季亂題で…… 静夫れにとても出来ませぬ、格夫れ  
で何日ぞや我等が思ひ出して心持ちが悪いと云ふ月の題で  
……今夜の宜い月でござる…… 静十三日で…… 格十三夜月  
の遠へとも如何でござるな……十三日で遣つて被下る事出来ま

せんか 一箇十三日の月で御座すますか 格何うも分りません本  
……イヤ然うであい十三夜の月なれば十三夜と言ふのだ……  
静夫れで

一年の月を登らす今宵かな

格夫れん歌で御座いません發句で御座います 静其上を附け  
ての…… 格困る御方でございますか…… 然んか事言ひれて

一年の月を登らす今宵かな

ハア是れ誰が遣つたア…… 宗祇が確詠んだと思ひますが宗  
祇と云ふのが或破寺に泊りし時何か怪物が多く集まつて来たど  
き何やら申しましたが今貴方が仰しやつた其句を思ふ…… 亦  
にやら言葉もなく黙つて居りました…… 小三郎の生垣の所の間  
より無念の涙暫しの間の止みもせず 小ウーン…… 夫れぢやア  
彼奴目が彼のお静めと疾から宜い中になつて居るのだあ人を察

子にしておきながら斯う云ふ事の有つたるか…… アー残念だ口  
惜い…… 夫れで餘り酷過ぎる…… 何うして呉れんか…… と  
ラリ…… と立ち歸つた小三郎の腹の内、非常に燃えて居り  
ます…… 小何としたり宜いか…… と思ひましたが分別のさい  
男でございますから一尺七八寸も有らうと云ふ脇差を何所から  
持ち出したか是れを腰に打ち込んで抜き足差し足忍び足で以て  
我親父の家を出まして再び来る根岸の御簾屋の静の家此方の  
皆夜も更けし事ゆゑ前後も知らず打ち俯して居ります静より  
室を隔て、池田格太郎只一人夜も碌々寐も送らず主人の家を驚  
したりして居たりしがトロ…… として見る者の中々に寝る  
事も成り兼ねて居たりけるが何時しか疲れて寝たる此時小三郎の  
太刀引き抜いて家に入り四方詠めつ襖を開けしが 小ウー……  
此時こそ怨を晴す時節あり…… とズーッ…… と忍んで能く寝た

百四十四

る池田格太郎……と云ふ高野 小己れ戀の敵我一人汝を殺  
 さば彼のお静の我物あり……と突込うとしたが手先狂ひて踏々  
 々……と這るから何條以て堪る可き 格ア……と斗り又腕  
 む覺ぬの格太郎小三郎を下と捻伏せまして 格天地を飾る大悪  
 人夜中忍び入り我生命を取らんとする扱の津田左源太の輩で有  
 るか此家に忍び我を斯くまで狙ふどの……と拳を固めて涙太打  
 ちに擲り附け 格高賀さん……お静さん驚き被下さ……と片方  
 の柱と結び付けました高賀のお静と共蠟燭と火を點して参り  
 ました 高何でございしました…… 格何奴あるか我を殺さんと  
 致しましたが……と蠟燭をク……と小三郎の鼻の所へ差付け  
 ましたから小三郎堪る可きか 小ヤ……熱い……お助け被下  
 ナカ……貴方を殺す様者ぢやア御座いません只殺しに來  
 たので 格何だど…… 小怨みが有つてぢやア御座いません口

惜くつて殺しに來たので……

第 十 三 席

格池田の家來にしての柔弱あるが抑も御身の何人あるかお静の  
 静お師匠様何うしたら宜うございませう……何で斯んな人が  
 出て参つたのでございませう 高マア……何うお騒ぎささいま  
 すか格太郎様が御在の事なれば…… 格何者あるか頭を上げエ  
 と言ひれて頭を上げれば斯の如何に一度お静の養子となりつれど  
 も枕の邊と交さで母のお留の戀男偶々泊りに行きし夫れが仇と  
 なり途にお留が邪慳にも火を放つて逃げ去りしが夫れも是れ  
 も小三郎故と思へば慄然として身の毛も逆立つ許り慄へ乍ら  
 静池田様……格太郎様……此小三郎さん兼てお話しした御簾  
 屋の養子です…… 静扱の御簾屋の養子よて…… 静エ……

阿母さんと戯れて情け無いか御簾屋の家の一夜の中に灰どきりし騒動……格御身の養子とあらんとして母と不義淫樂悪き所の男……然るよ何で我を殺さんとした……小何も殺さうとする氣のあかつたので有りすが貴方とお静さんと盗問交情の睦いを見てムシアクシヤしました彼の男を殺したならお静の養子よなれるか……格ハア、馬鹿な男だ然んな人物を殺したりとて何して益も無いお静殿は身何うなさる表沙汰まするも此儘歸し遣るとも、静先生さへお許しなれば私何とも申ませんが其まゝお助け被下ば是れに増したる幸ひに座りません、格元より拙者の彼様な人物に罪も報もなくまた斯る人物に殺される池田格太郎でも御座らんが馬鹿氣た事をするか外に女も有らうに、静私何な事をしたつて此人と添ふなんて心の御座いません、格左様なれば以來此男が亂暴なんぞせん様に右の

腕でも折つて遣りませう、静何うか願ひます……小馬鹿な事言つちやア不可ません何うか願ひますあんで假初にも腕の骨折つて何て……格然うで無い……小何う致しまして……格夫れでい金子を……静殿の最も不憫な事だが我等が善き所へ嫁入りとさせるが此後彼様な事を致すか……お静どの金子をお遣はし被下……静ハイ……夫れでい是れい少あう座いますがお渡しを、格百兩金……澤山です……是れ丈持つて何所へでも行つて女でも妻なり妾かりせよと言ひれて小三郎の値段も無く百兩の金を懐中へ入れたるまゝ茫然として出行きました、小ア……情無い此様目に遇ふ位なればいつその事家に居た方が宜つた今夜の空も朧夜雨の降らねども何と無く心細い事だ……いつを是れから大恩寺前を横よ見て吉原へ行つた方が宜らうぞ、女でも買つて寝やう……と溝の邊をブラ……と参り

ますが何うしたはづみか下駄の鼻緒を切りました。小「マァ……」  
 困つたな……と懐中から何か出さんとする時小判をバラリツッ  
 ……と落し置いたが四方の黄金の花。小「此りやア金を落した  
 ……意氣地が無くなつて仕舞つた……と言ひながら財布に小判  
 を入れて居ります折から今や此所へアラリ……と一人の侍  
 士跡より歩み来りしが今小三郎の金を落したのを見まして。今  
 是れ……町人……金子を何うしたのか……小「落しま  
 したのでございます。△金を落した夫れいどんでも無い事だ拙  
 者が拾つて遣らう……小「イヤ……と見上げるよお互  
 ひ又顔見合せて。小「貴方の大宮様之丞様では座いましたか。權  
 汝の小三郎だか……小「貴方のま……何うして……權「貴様  
 の何うした……小「今實に私しお静がこの上根岸にをりますか  
 ら其根岸へ少言ふ事があつて夜忍んで行きましたら侍士が泊る

て居りましたあのお静の手から百兩出させて縁切だど云ひまし  
 たが不實な奴では座います……權「お留の毒婦に詐れる貴様が  
 不實だ……不憚りのお静だ……彼なお留見たいな不屈な奴の無  
 い。小「でも貴方がは簾屋の家を取らうとしては簾屋の主人を毒  
 で殺して又お留さんを殺して大川へ投げ込んだのに……權「ウ  
 ーン……然な事まで口走るか……小「は死被下まし……私にお  
 先へ權「是れ……其金を置いて行け……小「何う致して……權  
 太い奴だ已一刀に切つて呉れるぞ。小「ナカ……持ち交して……  
 權「ナニ面倒か……小「は死被下……權「は免も何も有る者か  
 ……と咽喉の當りを一締グ……と締めましたが情かや断末魔  
 其儘小三郎の呼吸の絶え果ました。權「是れで宜い……と懐中よ  
 り取り出したる百兩跡の側の溝へ投げ入れて。權「馬鹿か野郎だ  
 ……折から一人小唄を唄つて酒に酔つて吉原の方から。○色氣

さいとて氣にせまい者賤がふせ屋に月がさす見やれ原にも花が  
 咲く……と大宮權之丞の足跡も下つて權之丞油斷あらじと躰  
 を寄せる 權貴様の田原賢三での無かつたか 田大宮氏どうせ  
 られた……誰かやられたか今迄何所へ…… 權遠方へ…… 田  
 遠方での分らんが何所へ行れました 權實の甲州の方に行つて  
 居つたが少く考ふる事有つて出て来たが……何うした道場  
 田疾の昔も無くなつて仕舞つたが何か怪しい事を此所らで遣ら  
 れたな…… 權別も怪しい事も無い…… 田怪しい……事が……  
 …… 權イヤ……怪しい事無いが實の今小三郎を殺して百兩取  
 つた…… 田エライナ……何うか夫れを分けて貰ひたいか 權  
 貴様も遣つての詰らん…… 田所を貰ひたい…… 田遣らんと  
 云へば仕方が無い是れから八丁堀の旦那衆へ訴へれば八方十方  
 から追手が来て取り巻かれるのだからお氣の毒だが大宮でも其所

の名におふ小宮でも脱れる事出来んから其金を置いて行くが  
 宜からう夫れでも信州路へ足を向ける氣で川越口へ逃げるから  
 小使ひ丈にお前も遣るから悉皆置いて行くが宜いよ……夫れど  
 も嫌あら此方の腕腕度お前を捕へて呉れるのだ 權大層手前  
 文句を言ふな賢三……道場を預けたの腕腕に乃公が見込ん  
 で遣つた夫れ故だが悪事の方も夫れ迄も出来たと思ひ無かつ  
 た手前が然う大きく出るから此世のお名残をさして遣らう……  
 …… 田何だ…… 權色氣無いとて氣にせまい者…… 田何だ此  
 世の名残だ…… 權殿がふせ屋に花が咲くと我は言つたぢやア  
 無いか…… 田如何にも言つたよ…… 權夫れだから已れの家  
 にペン草土の底へ埋つたら矢張り岩に千草が咲く花と矢張り  
 り花も咲くだらう……此所で死たら遣る丈の金は残して遣らう  
 が汝は生け置け事は出来んから大宮が及に罹つて相果よ 田生



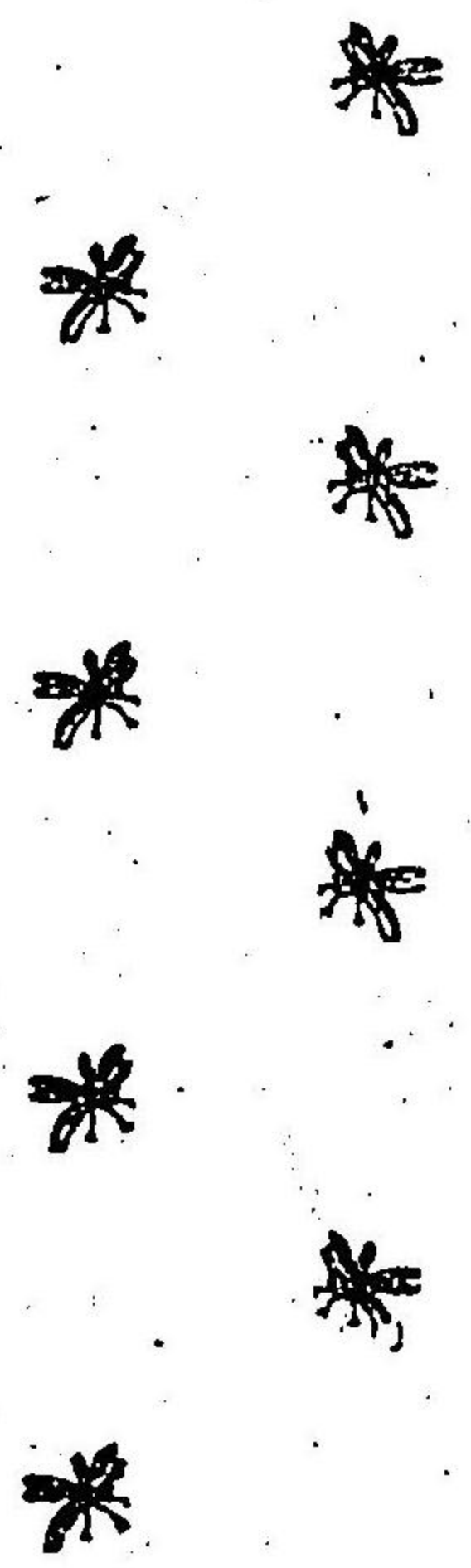
御 簾 屋 騒 動

意氣な事を言ふな……と田原賢三己の生命を捨てると思ひま  
せんから切つて掛りました 田汝が生命は貰つたぞ…… 權何  
を小癩な……と切り込んで来たのを横に避けておいて横郷りに  
郷り脇腹深く突込うとするど相手も名におふ賢三なれば身を交  
して切つて掛りますから大宮樓之丞一刀を頭上から浴びせ懸ま  
した何條以て堪る可き乳の下まで切り下げました 權天又代  
つて汝を誅す……是れからも……乃公も仕方が無い年貢を納  
める……とスプリ……と一指止めを指し其儘郷り捨て大膽に  
も其夜は吉原で遊んで翌朝になつて北の御奉行へ自ら御願ひ出  
まして 權花川戸の御簾屋のお留を殺し仔細有つて跡を踏まし  
昨夜大恩寺前に二人の男を殺したり夫れに御簾屋の静と云ふ者  
の不意の者で御坐りますと涙ながらに申しました侍士の事故  
揚屋入りとなりました所が熱病に罹りまして遂に相果てました

御 簾 屋 騒 動

が是れが爲めに御簾屋の娘お静を調べられましたが別にお掛ひ  
も御坐いませんで辰巳屋並びに仙台屋が 仙何かお静の身を固  
めたい……金は澤山は出来無いが少しは何うかするから……と  
申して居りますと幸ひなる哉池田格太郎が生涯侍士の止めて池  
田家へお出入りする商人となり度いと申して居られました所  
が池田家も奸佞邪智ある者の退けられましてお家も安泰とあり  
ました故御簾屋の家名の継ぎまして如何なる品物でも御用を遠  
すと云ふので池田の姓を名乗るのも如何であるからと淺岡の姓  
を名乗つて淺岡格太郎と申しました 格元の花川戸へ店を開く  
のも不吉だからと神田旭町近邊へ家を持ちまして池田家へお出  
入りして居りました所が此お静も格太郎も備前岡山へ行か無け  
ればあらぬ事がございましてとうとう……淺岡一家の備前岡山  
へ轉居して未だ備前に御子孫の居られますが其は親族が小石川

に居られましたのでお話を承りまして斯の如く申し上げました  
が善人の正に榮えて悪人の遂々辛き憂き目を見ると云ふ御簾屋  
の結局で御座います



御簾屋騒動終

三遊亭圓馬口演  
酒井昇造速記

第二席

根岸因果塚由来

一、合の楔よ師匠の歸りますまでお馴染の根岸の因果塚  
の由来と申お若伊之助のお話を申上げ升横山町三丁目よ  
探屋と申す幾種商さんが居坐いまして且那さまがお死  
去り遊ばして七年此方此細君が多くの奉公人を遣つて身  
代を管理して居らっしゃいました誠よ眞實ある方で坐い  
升お娘が一人坐います年十八又成り名をお若さん  
と申す其頃ハ標致の美しい婦人を俳優と比喩た見え  
まして現今で申さば新屋娘と申すので坐いませ  
うが其頃の事ゆる之を半四郎娘と申すので坐いませ

御 簾 屋 願 動

すすはの極致好の娘で母線の中の中珠と愛して居ら  
れましたふ若さん云ふ季の出る身分ゆるわか阿母  
さん何うお中節の稽古が爲たらう坐いますと云ふ共頃  
は大分一中節が流行たものと見えて阿母さんも何うか善  
い師匠が有たら宅へ呼びたいと彼方此方へ頼んで置きま  
すとお出入の蔭頭で薬研堀に居りました初五郎さんと云  
ふ仁が参りまして初小哥の心安くする者よ善い師匠が  
有りやすから之をお世話致しやせうと柳橋の裏河岸に居  
ります菅野伊之助と申して年廿一で比座い升が駿人  
よ似ぬ人柄の好い温和い人で此伊之助を堺屋へ連れて参  
りましたのが幾ら直も男女の情のまた別なもので二十  
一も成りませす奇麗な男を十八も成ります娘さんの所へ連  
れて参りませしたの些不覺お尋で毎日一中節の稽古を致

御 簾 屋 騒 動

すので傍坐いますが一中節の稽古だけ致して居れば宜い  
よさう住かぬものと見え或晩の事で母お師匠さん些と  
遅く成たから今夜泊つたら宜からうと云ふので宅へ泊  
め夜半は阿母さまが不圖眼を覺して見ますと並んで寐て  
居りましたお若の床が脚脱み成て居りますから母大方  
便所へでも往たので有らうと阿母さんが容子を窺がって  
居りますと一間隔った次の座敷に泊つて居り升伊之助の  
寐間で忍びやかにコソコソ話を致して居るもの有りま  
すが深夜の事ですから手に取るやうに聞えるの儘よお若  
と伊之助の盛ゆる阿母さんの吃驚して母是の頼だ事が  
出来たと一時の驚きましたかソコに伶俐ある方ゆゑ内々  
から火事を出すやうな事が有てのあらんと思召しました  
から傍ま有りませした煙草盆を取出し一服召上つて故意と

御簾屋騒動

音高くボーンと火玉を叩くと、わかに伊之助の胸のあたりで、  
たれるやうな音が、心持で、わかに伊之助の胸のあたりで、  
たやうです。それから、伊之助の顔を見遣りながら、  
けませんよと、伊之助の顔を、見遣りながら、  
たが直よ、我寮所へ歸つたら、露見しやうと、  
へ参りまして、戸をドンと開けて、締めた、  
手を洗つて、我寮所へ歸つて参り、  
ひました翌朝、成ると、伊之助の間が、  
爲て歸りまして、阿母さん、直よ、  
初五郎といふ、頭を呼びよ、遣り、  
一包み渡す、頭も、面、目、か、  
お辭儀を爲して、歸つて、仕舞、  
の處へ、彼の、お金を、持参り、  
何う話合も、成りましたか、

御簾屋騒動

伊之助の夫、切り掛屋へ、出入る事が出来なく、成りました。  
菅野伊之助の、頭、義理が有り、ますから、  
ました、が、お若の方、で、何う爲ても、  
ん、何うおすつた、る、り、と、案、  
積つて、病と、あり、顔、色、も、悪、  
た、是、が、所、謂、戀、煩、い、で、漸、々、  
配して、根、岸、御、行、松、の、傍、  
指南を、致して、居り、ます、若、  
で、自、分、の、兄、で、御、座、い、ま、  
宜ろ、しく、ない、事、で、一、休、  
く、伊之助の、事、を、思、ひ、ツ、  
去る者、日、々、疎、し、で、少、  
五

第二席

御簾屋騒動

を忘れるだらうから予が若を預つて遣らう予が預つて  
置けバ石の櫃の中へ入れて置くも同様だから安心しあさ  
いと是から若の根岸へ進れられて伯父さんの處へ預ら  
れました中々伊之助の事い少しも忘れる隙の有りませ  
ん月日の経過の早いもので恰ど満一年預けられて翌年  
三月下旬の事で御座います若が庭先の縁側へ出まして  
風よ誘はれて櫻がチラチラ散り参りますのを見て徐ろよ  
懐舊の情を起し 蒼ア。一情けなれ恰ど満一年斯う過て  
伯父さんの處へ預けられて居るが伊之助の所から何と  
かお音信ぐらゐ有りさうなものだ……夫れとも届いて  
居るか其處へ解らぬといけれども伊之助さんも引手数多の  
人だから若し他へ増す花でも出来ぬ為ないかと娘心よ苦  
慮くと思ひ詰めて居りましたスルトハラ 春雨が降

御簾屋騒動

り出して参りました後方の生垣も成て居ますから三河島  
反園が一圓も見えませう向ふから賑けて来る一人の男の途  
中の雨で反園道と云ひ雨宿りをする所へあし其頃ゆる雪  
踏を穿いて居りましたが濡れるを厭ひ雪踏を脱いで腰よ  
挟み羽織を疊んで懐へ入れましたから丸で飽細工の狸見  
たやうな懐を膨脹ましたン 跳足で履けて参る其の人  
の面指が何うも伊之助の似て居るやうでは坐い升尤も始  
終伊之助の事ばかり思ひ續けて居りますからチヨツと若  
い男が来てもオヤ伊之助さんかと思ひます位の處ろゆる今  
其男が漸く近く参りました所を見ると擬ふ方なき伊之助  
では坐いませうから若の庭下駄を穿き下りて参り三尺の  
聞きを開け四邊を憚りながら 昔伊之助さんぢやア有りま  
せんか……餘まり思ひ掛けないから妾の本統も吃驚りし

御簾屋騒動

ましたと戀慕さのまゝに伊之助の手を取て襟側のもとな  
で連れて参りドツカリ腰を掛けたのです。が最う然う成  
來ると嬉しいと哀しいとが込み揚げて來て思ふやうな口  
も利けません。只伊之助の膝へ兩手を突き穴の明く程チ  
と顔を凝視しておろりく。と涙を落して居るの眞ま哀しく  
ッて出る涙で人よ頼まれて吊詞も往て出る涙とい大さ  
違ひます折から奥の方で 隨コレく 藤三郎く 何日も  
若が燈火を照ける時分だ。がまだ照かんやうだと奥で大  
きお聲が致しました。だからお若の驚き儘て 若伊之さんア  
ノ聲の姿の伯父さんで。劍術の師匠さんで恐ろしい方正  
い仁です。から見答められでもする。と何ん事成らうも  
知れません。和郎さんの迷魂もある。と往けなから早く  
……何うか伊之さん。妾を可愛想だと思召す。あら今夜丑

御簾屋騒動

刻の鐘を合圖よ和郎さん。裏口から忍んで來て下さい。妾の  
坐敷が此處です。が夜中よ。誰も來ません。から何うぞ。後生  
です。から……と云はれて伊之助も可怖い。から何よ。も云は  
ず合點くを致しまして。其儘別れて仕舞ました。

第三席

伊之助の懐しいと見えまして。約束違へず丑刻の鐘を合圖  
よ。裏手の三尺の開きの處から。忍んで参りました。お若も待  
ち焦れて居り。まして久振で。違た事ゆゑ互ひも積る。時も有  
り。ました。翌朝見答められて。いな。らんと云ふので。伊之助は  
夜の明けぬ中よ。歸りました。が一度も致して。置けば宜い。が  
逢つて見ると。また然う。の往かぬと見えまして。最う一晩く  
と。近々忍んで参る事よ。なり。ました。が。婦人の受身で。伊  
います。から何時か。伊之助の胤を。懷孕。しました。三月四月の

御簾屋騒動

袖でも匿すがハハ五月の岩田帯と成りますと匿し切れま  
せん伯父さん早くも夫れと心附き 随何うも若の身の  
上が通常で無い發だと氣が附きましたから或晩ソツと  
若の部屋を覗いて見ますと何時の間忍んで来て逢引を  
致しますか伊之助が参つて居りまして誠と睦しくお若と  
話らつて居る容子を見て心を痛めました 随ア、一顧だ  
事が出来たソイ妹の處から彼を連れ来て来る時予が預か  
つて置けバ石の櫃よ納れて置くも同様だから心配するお  
と高首を放つて置さあがらすの宅も於て伊之助と逢引を  
されての妹とソアがら横山町又云譯があいから一層  
み込んで一刀の下よ斬て仕舞はふかどの思ひましたガソ  
コハ年を老て居る方ゆゑ分別が有りますからまた氣を取  
直し 隨イヤ、然うでない短氣を申を爲てのならんと

御簾屋騒動

其の晩の耐忍を爲て寐て仕舞ひ翌朝早く呼びよ選たのり  
初五郎と云ふ盜賊で身遣れぬ出来ませんから盗賊の何事  
が出来たかと肝を潰して飛んで参り勝手口へ掛りまして  
初エ、お願やしやすお願みややく 取次「ト、是れ  
お出何方から 初エ、小町の藥研堀の爲の者初五郎とす  
やすが先生からお使で坐へやしたので出やしたへ」と  
窓舌の早官で申すから取次の者よの聞取れませんか 取  
「ナ、何んだとエ 初エ、藥研堀の爲の者初五郎で 取エ、肴屋  
かエ 初エ、藥研堀の爲の者初五郎で 取エ、肴屋  
初エ、ナニ然うぢやアない…… 藥研堀の初五郎と云ふ  
爲の者ワン左様か少々か扣へ…… エ、申上げます 隨何  
んだナ 取エ、藥研堀の初五郎と申すものが先生よお目  
通りを致し度いと申して参りました如何致しませう 隨

御簾屋騒動

「よ、左様か早速此處へ通せ……コレ、茶を入れて來い  
取「へエ……初五郎とやら此方へ上りと案内を爲て來い  
へ連れて參る初五郎の敷居の外で初エ、鹹又無沙汰  
を致しやした。隨「ア此方へ道入り、もツと此方へ  
道入てお呉れ……コレ、藤三郎少しの間話があるのだ  
から誰も此方へ參らんで宜しい若し用が有れば呼ぶから  
其方へ參つて居ろ……サア齋頭此方へお出、初エ、先生  
小「哥もナヨイと齋堂あきれアならぬへんでげずが存じあ  
がらツイ、無沙汰を致しやした夫れよ、昨内よ些とば  
かりゴマ、が有たり何か爲たので大き又無沙汰よ成  
て相濟みやせんが、願さまも此家へ入らつしやいまし  
て少しの加減の宜いやうに承りやしたが……今日いま  
た急來いと云ふ使者でげしたから直又參りやしたの

御簾屋騒動

で、隨「イヤ無沙汰の互ひの事で能く遠方の處を呼び立  
て、鹹又氣の毒だが少しノウ齋頭和郎よ聞き度い事が有て  
呼びよ、遣た譯だが他の事でもない若の身の土よ就いて予  
の精しい事知らんければ、和郎が一中節の師匠とやら  
を世話を爲て呉れた處が若と仔細有た事での無からうけ  
れども若い者同志だから若し間違ひでも有ちやアならん  
と云ふ處から三十金遣て伊之助の出入を止めたと云ふ然  
る處若が其後不快で往かんと云ふ處から私が預かッて居  
るが共折遣はした三十金の金子が半ば溜ッて伊之助の手  
よ遣入らんで有るまいかと云ふ考がへを起して居るが  
彼の三十金の儘かよ伊之助の手よ遣入りましたか

第四席

初「へエ鹹又何うも其のお話しが出やすと小「哥が往届き



御簾屋騒動

やせんで済みやせん小ぢも悪かれと思つてお世話ア爲た  
てニ譯ぢやア有りやせんが伊之助が心得違へを爲て面目  
次第も傍坐へやせんお内儀さんが解つた方ゆゑお金を下  
せへやしたから買ひ其のお金を戴きやして先生の前で  
坐へやすが先方も藝人の事ですから頂戴致しやした金子  
の先方へ渡すよも渡さねへも和郎さん其日の中又儲か  
よ伊之助も渡して先方からチヤンと受取も取りやして横  
山町へ一切這入るゆへと云ふ儲か又番付まで取て置きや  
したのでへエ 随和郎の事だから間違ひも有るまいが念  
の爲だから開いて置くが伊之助が三十金取り儲か又出入  
のしまいと云ふ書付まで入れて置きあがら再び其の伊之  
助が若と違引するやうな事が有つて済むまいナ 初エ、  
是の済むノ済まねへのつて然んを事が有つちやア小ぢが

御簾屋騒動

お店へ對して済みやせん有る氣遣へい無へけれども若し  
有ちやア済まねへ所ぢやア座へやせん 隨ふ、一若し  
眞然う云ふ事が有たら和郎何と申譯をするナ 初何と  
申譯をするつて然んを事の有る氣遣へいありやせんが若  
し伊之助が心得違へを爲てお若さんを引張り出すやうな  
事が在ちやア小ぢがお店へ済みませんから小ぢが彼の野  
郎を踏捕めへて腕でも挫打つて小鬘の毛を一本く引こ  
抜いて申譯を爲なけりやア済みやせんがア大丈夫でへ  
エ 隨所が處頭若が懐妊致した何うも容子が訝しいから  
昨夜予が若の部屋を狙つて見ると何時の間よ忍んで參る  
か伊之助が若の所よ參つて逢引を致して居る所を確かに  
予が見届けた……イヤ儲か又見認たよ依つて實の其場へ踏  
み込んで伊之助を手討に致さうと心得たがイヤく然り

でも無い三十金の金子が若し伊之助の手へでも運入らん  
やうな事があるとならば行進ひが出来やうと心得忍耐して  
歸したがり横山町から若を連れて来る時乃公が預か  
つたからより安心しろと高言を放って置いた事も有るよ  
子の家で若が伊之助と逢引をするのみならず懐妊もまで  
成て見れば何んぞ少譯を致して宜いやら横山町へ手が濟  
まん為頭和郎も濟ひまいぢやアあいか 初へエ……何と  
も何うも願でもぬへ事を為やアがる彼の時よ小吉がアレ  
程まで咬で含めるやう云て聞かして置いたのよ然ん  
な量見違へな事を為やアがッて本統よ……先生何うも誠  
よ相續みません小吉が店よ對しても讀まぬへ譯だから  
宜う御座へやす先生の御迷惑も成らぬやうよ是から直  
よ小吉ア柳橋へ往きやして伊之助の野郎を捕捉めへて少譯

を爲なけりやアなりやせんへ直又往て参りやす左様あ  
らとアいと飛び出しましたが現今あれば腕車が有りませ  
から雜作の有りませんが未だ腕車の無い時分だから息を  
切てンく 柳橋の裏河岸まで駆け通して参り 初ア、  
し恐ろしい目よ迷った……オ、珍免よ師匠在宅か 伊へ  
ユ……是のお來臨なさいませし是は何うも為頭サア何卒此  
方へお昇んなさいませし……何處へ恐ろしく大變なせエ  
息を切てお在なざるが 初ハア……息が切れて堪ら  
ぬへ…… 伊大變なせエ 息を切つてお在なざるが何所  
へ往つてお在なさいませした 初ハア……

第五席

初師匠少し和郎も用が有んだが誰も宅よやア居ねへか  
伊誰も居りませんへ私一人で 初老婆の 伊老婆の

御 簾 屋 騒 動

米澤町まで使よ遣りました 初然うか…… 隣家の何んだ  
 伊「へ……」 初隣の家何んだ 伊「へ……」 頭電け  
 ちやア往けません 隣何んだって小稻さんてエ越者衆  
 で 初「ム」 逆へね…… 居るかイ 伊「然うですよ昨日上  
 手へ往くと云ふ話でしたか未だ歸って来ないやうで 初  
 左隣ハ 伊「左隣ハ箱屋の吉どのの家なんで 初在宅かイ  
 伊「イ」 朝湯も往たてエます 初「マ」 其處へ坐らんぬへ  
 伊「へ」…… 何んで 初「オ」 師匠乃公ア和郎ハ然んる  
 仁ぢやアないと思つたけれども實は驚いたよ 伊「へ」……  
 …… 初「へ」 ちやアねへせエオイ乃公の面へ泥を塗るツた  
 のて潰すたツて本統よカラ何も聴へちやアねへかど歐か  
 ら棒も即突を喰ひ何だか隣が解ませんからメゲン赤紙で  
 伊「何ですか知りませんが私の斯う云ふ茫然した人間で

御 簾 屋 騒 動

すからお客を失策ツて時々叱言を喰ひ肝を潰して謝罪に  
 往く事あども有りますか何んぞお氣も障るやうな失策が  
 有りましたか 隣張り存じませんがナ何んで何う云ふ隣け  
 で 初「エ」 何う云ふも斯う云ふも無へちやアねへか乃公  
 の口から此様な言を吐へ立てると何か和郎を世話ア爲た  
 事な越えと思ふ掛けるやうだが一ト通り云ひなけりやアを  
 らねへ成程和郎ハ齋立派な用達の息子さんヨ和郎の阿  
 父さんハ乃公も世話又成た事も有るが和郎の家も少し  
 の往き違へから破産れて仕舞て和郎が茫然と乃公の家へ  
 来て 初「何分願ひてエから」 伊「思返しと云ふ程よ」 出来ぬ  
 エが家へ置いて然うして何うかマア和郎の身の立ッやう  
 又爲てエと思つて和郎の腕の好いのも知てるから隣ハ身  
 を助ける程の不仕合と云ふが一中節の師匠をさせて乃



御簾屋騒動

初書付あんなぞ何本書いたって往けないヨ申職ぢやア  
無へせ和郎だッて柳橋の裏河岸に居るから若二嬢が伊之  
さんハ本統よ好いヨぐれへ聞きッ扱みやア公乃も最負役  
者だから影で惚氣て居る位の歸ぢやアねへか夫れが何  
もビヨコノ根岸クンダリまで宵夜申出掛けて往くにや  
ア及バねへ和郎ハ處女が嗜あのか伊何んで初何んで  
も無へもんだ……伊爲頭何んだか寐耳よ水で私よの  
とも譯が解りませんが他所で聞けば若さんハ根岸の方  
の劍術の先生の處へ預けられて居るやうよ聞きました  
貴郎のお口裏で何よ私がお嬢さんと再び逢引を爲た  
やうよ初爲たやうも無へもんだ最うチヤンと事實が  
ッてるんだ惚娘だともボラレンぢやアねへか今朝突然

第六席

御簾屋騒動

呼びよ遣して劍術退への處からヨ然うして斯う云やアが  
ッた三十兩遣ッた金ハ半ば溜ほッて居るッて何よか乃公  
が消費ひ込んだと云はねへばかりぢやアねへか新様お稼  
ぎころ爲てゐるが錢ハ無クッても町内の金を百兩や百兩  
半預かる乃公だ錢金の事で彼是れ他人云はれた事は無  
へが使へ込んだと云はねへばかりよ吐しやアがッたから  
敵手が劍術遣へで無けりやア歐り飛ばして遣らうかと思  
つたが仕方が無へから淡しましたてニと若し伊之助が其  
金を受取ッて置きあがら若と逢引きを爲ちやア濟むり  
へ貸ハ昨夜伊之助が來たのを見たお若が懐妊よ成ッたて  
ニから何うも申譯が有りやせんと云ふより他よ換扱よも  
困るぢやアねへか仕やうがねへから野郎を取ッ捕めへて  
腕でも挫折ッて小鬘の毛を引ん抜いて野郎の身体利か

御簾屋騒動

ねへやうよでも致しやすと云ふより他に仕方かねへが又  
た此處へ来て見れば平素心易く爲て居るから腕も挫折れ  
ねへが伊之本筋は何う爲て呉れるんだ然んな仁ぢやア無  
へと思つたが情け無へ奴だナ和郎の伊齋頭何時私か然  
んな事を……初然んな言を云つたッて往けねへヨ昨夜  
和郎が往つた所を御衛道へ見られたのだ毎晩往くんだ  
らう伊齋頭ア貴郎マア少し沈着いて下さい然んから何  
んですか昨夜私が往つた處を見届けたと先方で云ふのだね  
いくら先方で云つたッて昨夜の往く譯の坐いませんと  
云ふのの貴郎が儲かか証人だから申譯を致しますが昨日  
の暮方よ貴郎が盆盆來て一緒に飯を喰ひま往かねへかッ  
て川長さんへお供を爲て久しい事飲んで廊へ往うぢやア  
あいかと仰しやるから姉さんよ濟さいと思つてお止申度

御簾屋騒動

かつたが一旦云出すと後へ退かい御氣性だから夜船で吉  
原へ往まして貴郎と一緒に遊びましたから何うしたッて  
昨夜の根岸杯へ往く譯の無いぢやア有りませんかエ、驚  
頭と云ひれて初五郎の小首を傾け暫らく考へ初ッン違  
へねへ彼の昨夜けへ違へねへ然うだ成程和郎を曳ッ張ッ  
て廊へ往たなア……何を云やアがるんだ彼の御衛道へ  
何んだ笑かしやアがる……是は何うも問が惡イ堪忍して  
呉んな此奴ア問が惡イ困却つたあア實の和郎の頭を殴り  
飛ばす氣だつたが打たかくツて宜かつた……何を云やア  
がるんだあ彼の御衛道へ……待って呉んな乃公アナ  
ヨいと根岸へ往つて來るからと又たトットと大急ぎで遣  
ッて参りました隨何を……齋頭が往つて來たと……  
此方へ通して呉んなさい……サア此方へ初ア、一……

やした…… 隨マア此方へ来るさい何う爲たエ伊之助の  
宅へ往ったかエと云はれて頭を掻きながら 初先生小吉  
ア粗忽しくつて半分物を聞いて飛び出す人間だから困り  
やすが先刻尊公の仰しやるよ昨夜伊之助の野郎が来た  
仰しやいましたる 隨左様サ儘かよ昨夜見た

第七席

初昨夜伊之助の来る氣遣いありやせん 隨何故 初何  
故ッたッて何う爲たッて昨夜の来る時無へ事が在りや  
すへエお話しをゆさんで解りやせんが昨日の暮方小吉  
が伊之助の處へ往つて飯を喰ひよ一緒に往きなッて川長へ連  
れてッて代地で一盃飲つて年甲斐も無く面目無へが酒の勢  
ひで思だてエの無理に連れて廊へ遊びま往たんですか  
ら何うしたッて伊之助が此方へ来る時遊びま往たんですか

エ 隨マ、夫れで何か昨夜和郎が伊之助を連れて廊へ  
遊びま往ったから来る氣遣い無いと云ふのか夫れが云ひ  
譯か左様な事他處へ往つて云ひナ 初へエ…… 隨何故  
然んさらバ先程其處で直よ其云譯を爲さかッた一旦此家  
を出て那處へ往つたか知らんが左様な事を申して来たッて  
遊へ事としきやア思はれさいちやアあいかあぜ先刻同道  
して廊へ往きましたと云はなかつた 初云はあかつたッ  
てへエ…… 最り小吉ア肝を潰して無茶苦茶よ飛び出  
して騙けてッて彼奴を殴り飛ばさうと思つて一伍一什を  
並べ立ると窓頭申云さやア往けません昨夜の往ける譯  
の無へと云はれて考へて見たら成程さうだから歸つて來  
やしたんでへエ殊よ寄たら一昨日の晩と昨夜と間違へや  
ア爲ぬへかと思つて歸つて来たんでへエ 隨マ、……





御簾屋騒動

ない寐こかしよ爲たッて寐こかしよ爲ないたッて一睡と  
も爲やア爲ません貴郎が一ト寐入りしやうと云ふ中よ最  
う連子へ日が映ッて来ましたから直よ駕籠屋を呼びよ遣  
ッて和郎さんど一緒よ駕籠へ乗ッて歸ッて来たので昨夜  
の貴郎が便所よ出なざるまで甚く酔つてお在あすつたか  
ら私に貴郎の傍を離れやア爲ません寐こかしよも何よも  
然ん事の出来あいちやア在りませんかと云はれてモチ  
しあがら 初ムーさうだ變法箇来たナ……成程寐や  
うと思ふ中よ夜が明けた……何を云やアがるんだらう彼  
の劍術道への……違へね和郎の處まで一緒に歸ッて来  
て夫から宅へ往て朝湯よ這入ては膳を喰べやうとする  
根岸から使者が来たから直よ飛出して往たんだが大した  
間違へた何よしろ最う一逼往ッて来やうと又駈出して限

御簾屋騒動

屏へ行きました  
第 八 席  
隨齋頭が歸ッて来たかサア此方へ 初ア、一驚ろいた  
ハア……先生何んと仰しやつても昨夜の参る氣遣への  
在りやせん寐こかしよも寐こかしでねへよも昨夜の伊之  
助も小哥も一睡りとも爲ねへで夜明しでユ、夜明しをし  
て今朝早く駕籠に乗ッて家へ歸ッて夫れから此家へ来た  
んでへエ 隨齋頭和郎夫れに全くか 初先生小哥が何  
だッて虚言を吐く氣遣への有りやせん 隨ハテナ……然  
う云へば予は横山町へ姪子講の折よ招待れて往つた時よ  
伊之助と云ふ者も来合せて居て一逼逢つた限りだが世間  
に似た者も有るから殊よ寄つたら予の眼違ひかも知れ  
ない……何しろ斯うして呉んナ今夜の宅へ泊ッて和郎其

御簾屋騒動

者を見定めて呉んナ 初エー位しう座へやす何卒小番  
を泊て下せへまし無ぞ吃驚するだらうと背から向餘巻を  
爲て初今夜來やアがれア安穩ア置かねへど張腕を爲て待  
ッて居りまじたが前の晩終夜明しを致して居りますか  
ら次第よ夜が深更るよ從ッて居睡りの中宜いが終よ  
ゴロりと横よ成り腕を枕よしてグウーノ 寐て仕舞ひま  
したが生先生の寐の致しません玉浦頃ろッつと廊下傳ひま  
参りまして障子越しよ明いて見ると昨夜よ違はず亦團の  
上よて睡まじく語らつて居るからソツと寢所へ参り初五  
郎を揺り起し 隨寢頭ノ 初ア、最う飲めねへノ 隨  
無蓋けちやア往ないオイ…… 初コレのお早う 隨お早  
くのさい夜中だ氣丈りしあさい若の部屋よ伊之助が來て  
居るから見届けて呉れ 初へ……來てぬますか宜しい

御簾屋騒動

隨靜かよ爲あくツちやア往けさいと廊下傳ひよッつと  
参りまして障子の破れから覗き見て 隨何りた人が違ふ  
か 初ア…… 彼の伊之助よ違へねへ 隨相違さいか夫れ  
ぢやア和郎手を偽ッたか 初今夜來て居るの伊之助よ  
違へねへが昨夜の何う爲たッて來る譯の無へんで 隨併  
し昨夜認めめたのも此者よ相違ないが…… 寢頭其言葉の違  
ふまいなと念を押して與へ立戻り火繩の窓附けて有りま  
す短い鐵砲を提げて参り障子越しよ放たうとする容子を  
見て驚き驚てノ押し止め 初先生ア待ッて下せへ彼の野  
郎の彈殺しても宜いが若しお嬢さんよでも…… 隨ナニ  
彈丸の外れる事のないと狙ひを定めバチリオドンと放す  
と惜かよ手答へが致しなしたやうでスルどガークと云  
ふ物音で御座いますから家弟子が三人ばかり居りますか

御簾屋騒動

鐵砲の音よ驚いて飛び起き素裸体よ手廻を掛け各自も獲物を提げて参り甲先生浪籍者が遣入りましたか  
々方静かよ爲て下さいと云ひながら障子を開けて彈玉煙を拂ッて傍へ近附いて見ますとお若さんの氣絶して其處へ倒れて居ります其の側を見ると彈丸に當つて倒れて居りますの年經し大狸ゆゑ吃驚して初先生狸だ  
かよく何うも子も殊よ寄ッたら狐狸の仕業で無いか  
と心得斯くの計らッたが完く若の伊之助を慕ふ氣を知ッて之れへ参り違引さしたものだらうが何よしても若が身重よ成ッて居るから産み落さん中か世間へ話しが出来んから決して口外して下さるお止めましたさても若の十月月経過で産み落じましたの情けないかあ男女の三ツ子よして成人の後ち女の子の品川の媚妓よ成り男二人は兄弟

御簾屋騒動

で之れを買ひ通しますと云ふ根岸の畜生塚の由来と云ふ  
お話で伊坐います

根岸因果塚由来終

222  
119

明治卅四年十二月廿七日印刷  
明治卅五年一月九日發行

御簾屋騷動  
不許複製

講演者

東京市京橋區日吉町二番地

發行者

植 柘 正 一 郎

印刷者

全 日本橋區通り三丁目十三番地  
內 藤 加 我

印刷所

全 淺草區左衛門町一番地  
田 附 平 次 郎

發行所

全 今 泉 堂

東京市日本橋區通り三丁目十三番地

金 櫻 堂